

『三体詩』 七言律詩

『三体詩』においては、七言律詩を、①四実、②前虚後実、③前実後虚、④結句、⑤詠物に区分している（五言律詩と違って「四虚」の分類が無い）。このうち、

- ④ 結句：尾聯に特徴のあるもの
- ⑤ 詠物：物を詠じたことに特徴が有るもの

であるが、①四実、②前虚後実、③前実後虚においては、領聯と頸聯に着目すると共に、実体のあるもの（景物）を述べている場合

（典型的には写景）を「実」、実態のないもの（情思・作者の思い、感情）を述べているものを「虚」と呼び、

領聯、頸聯とも「実」である詩を①「四実」、領聯が「虚」、頸聯が「実」である詩を②前虚後実、領聯が「実」で頸聯が「虚」で有るある詩を③前実後虚と呼んでいる。

『三体詩』収録の詩には、難解なものもあるが、『國譯漢文大成・三体詩』には、殆どの詩について、領聯、頸聯の構成が記載されているので、律詩の作詩においては非常に参考になると考えられる。

四実

同題仙游観

同じく仙游観せんゆうかんに題す

韓かん
翹こう

仙臺初見五城樓

仙台初めて見る五城樓

風物淒淒宿雨收

風物淒々せいせいとして宿雨しゆくう收まる

山色遙連秦樹晚

山色遙かに連なる秦樹しんじゆの晚くれ

砧聲近報漢宮秋

砧聲ちんせい近く報ず漢宮の秋

疎松影落空壇浄

疎松そしょう影落ちて空壇くうだん浄きよく

細草春香小洞幽

細草春香かぐわしくして小洞せうどう幽ゆうなり

何用別尋方外去

何んぞ用いん別に方外を尋ねて去ることを

人間亦自有丹丘

人間じんかん亦また自ら丹丘たんきゆう有り

【語釈】

○仙游観：漢の武帝が作った寺。長安の西山にある。○仙臺：仙遊
観。○五城樓：崑崙山にある仙人の住む楼、仙游観に比定した。○
萋萋：寂しく痛ましいさま。○宿雨：前夜からの雨。○山色：山の
景色。○秦樹：咸陽の樹木。○何用：どうしてゝする必要があろう
か。反語。○方外：中国域外の地、ここでは仙游観以外の地。○人
間：人間社会。○丹丘：道士が説く離騷の山。

和樂天早春見寄

樂天が早春に寄せらるるに和す

元稹^{げんじん}

雨香雲淡覺微和

雨は香^{かんば}しく雲は淡くして微和^{びわ}を覺ゆ

誰送春深入棹歌

誰か春の深きを送りて棹歌^{とうか}に入る

萱近北堂穿土早

萱^{かや}は北堂に近くして土を穿^{うが}つこと早く

柳偏東面受風多

柳は東面に偏^{へん}して風を受くること多し

湖添水色消殘雪

湖は水色を添えて殘雪消え

江送潮頭湧漫波

江は潮頭^{ちやうとう}を送りて漫波^{まんば}湧く

同受新年不同賞

同^{とも}に新年を受けて同じく賞せず

無由縮地欲如何

地を縮むるに由^{よしな}無く如何^{いかん}せんと欲す

【語釈】

○微和：旧曆一月の候。○棹歌：舟歌。○穿土：土を破つて芽を生じる。○潮頭：潮水の波の頂点。○漫波：大波。○無由：方法がない。

【構成】

○第一句：時節。○第二句：彼（白居易）と此（元稹）。第三句：彼。○第四句：己。○第五句：彼。○第六句：己。○第七句。第六句：彼と己の双方を言う。

和趙相公登 趙相公の「鶴雀楼に登る」に和す 殷堯藩

危楼高架沈寥天 危楼 高く架かる 沈寥たる天

上相閑登立綵旃 上相 閑に登り 綵旃を立つ

樹色到京三百里 樹色 京に到ること 三百里

河流歸漢幾千年 河流 漢に帰ること 幾千年

晴峰聳日當周道 晴峰 日に聳えて 周道に当たり

秋穀垂花滿舜田 秋穀 花を垂れて 舜田に満つ

雲路何人見高志 雲路 何人か 高志を見す

最看西面赤欄前 最も見る 西面 赤欄の前

【語釈】

○趙相公…不祥。○鶴雀楼…中国山西省永濟県の西南の城壁にある三層の角楼。東南に中条山、眼下に黄河を望む名勝として知られる。○危楼…美しい楼、ここでは鶴雀楼。○沈寥…からりとして空しいま。沈寥天は秋の空にもちいる。○上相…趙相公のこと。○綵旃…彩られた旗。○京…長安。○周道…周王の都、西安。○舜田…舜が父の為に田を耕したところ、山西省平陽府蒲州。○雲路…雲の間、箇々では楼の上。○何人…趙相公以外の人。○西面…鶴雀楼より西の長安に向かうこと。○赤欄…赤い欄干。

【構成】

○第一句…楼。○第二句…登る人。○第三句…楼上の所見、第四句…高景。第六句…低景。○第七句・第八句…相公の人格。

凌歊臺

凌歊台 りようこうだい

許渾 きよこん

宋祖凌歊樂未回

宋祖の凌歊 樂しみ 未だ回らず かえ

三千歌舞宿層臺

三千の歌舞 層台に宿す

湘潭雲盡暮山出

湘潭 しょうたん 雲 尽きて 暮山 出で

巴蜀雪消春水來

巴蜀 はしよく 雪 消えて 春水 來る

行殿有基荒齋合

行殿 こうでん 基 もと 有りて 荒齋 こうせい 合し

寢園無主野棠開

寢園 主 無くして 野棠 やとう 開く

百年便作萬年計

百年 すなわ 便ち 万年の計を作せども

巖畔古碑空綠苔

巖畔 がんはん の古碑 空しく 綠苔 りよくたい

【語釈】

○凌歊臺・凌歊：安徽省馬鞍山市當塗県の北にある楼台、南北朝の宋の高祖が作った物。○宋祖：宋の高祖劉裕。○湘潭：湖南省湘潭市湘潭県。○巴蜀：四川省にある巴と蜀の二郡。○行殿：行宮。離宮。○荒齋：荒れた地に生えるナズナ。○寢園：天子の墓。○野棠：野生の海棠の花。○巖畔：岩のほとり。○古碑：宋祖の功を標した古い碑。」

【構成】

○第一句・第二句：昔年。○第三句～第六句：今の所見。山は高所、水は低所、行殿は高所、寢園は低所、○第七句・第八句：全六句を終結して我に帰宿す。

（「絶海（中津）が学ぶところ、多く此の詩にあり」とあり）

洛陽城

洛陽城 らくようじょう

許渾 きよこん

禾黍離離半野蒿

禾黍 かしよ 離々 りり として なかば 半 な は やこ 野蒿

昔人城此豈知勞

昔人 せきじん 此 こゝ に城 きつ きて あ 豈 あ に勞 あ を知らんや

水聲東去市朝變

水聲 すいせい 東 あづま に去 い りて あ 市朝 しちやう 變 あ じ

山勢北來宮殿高

山勢 さんせい 北 きた より來 き たりて あ 宮殿 きうてん 高 たか し

鴉噪暮雲歸古堞

鴉 あ は あ 暮雲 ぼくうん に噪 さわ ぎて あ 古堞 こてい に歸 かへ り

鴈迷寒雨下空壕

鴈 あ は あ 寒雨 かんう に迷 まよ いて あ 空壕 くうごう に下 くだ る

可憐緜嶺登仙子

可憐 あはれ 緜嶺 めんりやう の登 のぼ り あ 仙子 せんし

猶自吹笙醉碧桃

猶 な お あ 自 おのずか ら笙 しやう を吹 ふ きて あ 碧桃 へきとう に醉 よめ う

【語釈】

○禾黍：稻と黍。○離離：草木が生い茂るさま。○野蒿：よもぎ。○古堞：古い白く塗った垣根。○緜嶺：洛陽の隣にある山。○登仙子：「羽化登仙」により仙人となった人、ここでは周の靈王太子晉のこと。故事有り。

【構成】

○第一句：今。第二句：昔。○第三句～第六句：今。○第七句・第八句：今昔を結んで一に帰す。

金陵

金陵

許渾きよこん

玉樹歌殘王氣終

ぎよくじゆ 玉樹 歌 残りて 王氣 終わり

景陽兵合戍樓空

けいよう 景陽 兵 合して 戍樓 空し

楸梧遠近千官塚

しゅうぶ 楸梧 遠近 千官の塚

禾黍高低六代宮

かしよ 禾黍 高低 六代の宮

石燕拂雲晴亦雨

せきえん 石燕 雲を払いて 晴れて 亦た雨ふり

江豚吹浪夜還風

かうとん 江豚 浪を吹いて 夜還た風

英雄一去豪華盡

英雄 一たび去りて 豪華 尽き

惟有青山似洛中

た 惟だ せいざん 青山の 洛中に似たる 有るのみ

【語釈】

○金陵：南京、六朝時代の南朝の都。○玉樹：玉樹広庭花。陳の後主が作った亡国の歌。○景陽：景陽楼、南北朝の宋の時代に築かれた。○戍樓：守備のために設けられた物見台。○楸梧：ヒサギとアオギリ。桐の総称。塚に多く植える。○禾黍：稻と黍。○石燕：イワツバメ、雨に遭うと飛ぶという。○江豚：ふぐの一種。

【構成】

○第一句・第二句：昔。○頸聯：今の陸上の景。○頸聯：今の江上の景。

咸陽城東樓

咸陽城の東樓

許きよ
渾こん

一上高城萬里愁

一たび高城に上れば 万里愁う

蒹葭楊柳似汀洲

蒹葭けんか 楊柳ようりゆう 汀洲ていしゅうに似たり

溪雲初起日沈閣

溪雲けいうん 初めて起りて 日閣に沈み

山雨欲來風滿樓

山雨 来らんと欲して 風樓に満つ

鳥下綠蕪秦苑夕

鳥は綠蕪しんえんに下る 秦苑ゆうべの夕

蟬鳴黃葉漢宮秋

蟬は黃葉に鳴く 漢宮の秋

行人莫問當年事

行人こうじん 問なう莫なかれ 当年の事

故國東來渭水流

故國こく 東來とうらい 渭水流いすいる

【語釈】

○咸陽城：西安詩にある咸陽、秦の都。○蒹葭：オギとアシ。○汀洲：水中に土砂が溜まって出来た中洲。○綠蕪：緑の雑草、青々と茂った草。転じて亡国の跡をいう。○秦苑：秦の時代の御苑。○行人：旅人。○當年：当時。○故國：昔より続いている国。○東來：東に向かつて。○渭水：黄河の支流の一つ、甘肅省から、陝西省咸陽市の南、西安市の北を流れて黄河中流の潼関で合流。流域の盆地は関中と呼ばれる。

【構成】

○領聯：無情の物の写景。○頸聯：有情の物の写景。○尾聯：自分の情を詠う。

晚自東郭回留一二遊侶

晚に東郭自り一二の遊侶を留む

許 渾

郷心迢遼宦情微

郷心 迢遼として 宦情 微なり

吏散尋幽竟落暉

吏散じ 幽を尋ねて 落暉を竟う

林下草腥巢鷺宿

林下草 腥くして 巢鷺 宿り

洞前雲濕雨龍歸

洞前雲 湿いて 雨龍 帰る

鐘隨野艇回孤棹

鐘は野艇に従いて 孤棹を回し

鼓絶山城掩半扉

鼓は山城に絶えて 半扉を掩う

今夜西齋好風月

今夜 西齋に 風月 好からん

一瓢春酒莫相違

一瓢の春酒 相違うこと 莫かれ

【語釈】

○東郭：東の城壁。遊侶：遊び友達。○郷心：故郷を思う心。○迢遼：遙かなさま。○宦情：仕官したいという気持。○吏散：官吏にして閑の有る身分。○幽：閑かで奥ゆかしい趣。○落暉：沈み行く太陽。夕日。○雨龍：龍の一種。○野艇：野水に浮かぶ小舟。○孤棹：孤舟。○西齋：文人の書齋。○春酒：冬に仕込んで春に熟した酒。

【構成】

○首聯・頷聯：東郭での遊びの動機とその風景。○頸聯：東郭より帰ったときの叙景。○尾聯：遊侶を留める吾が家の事を述べる。

題飛泉觀宿龍池

飛泉觀の宿龍池に題す

許渾

西巖泉落水容寬

西巖泉落ちて水容寬く

靈物蜿蜒黑處蟠

靈物蜿蜒として黒処に蟠る

松葉正秋琴韻響

松葉正に秋にして琴韻響き

菱花初曉鏡光寒

菱花初めて曉けて鏡光寒し

雲收星月浮山殿

雲は星月を収め山殿に浮かび

雨過風雷遶石壇

雨は風雷を過ぎて石壇を繞る

仙客不歸龍亦去

仙客帰らず龍亦た去り

稻畦長滿此池乾

稻畦長く満ちて此の池乾く

【語釈】

○飛泉觀：道士の寺の名、浙江省建德県にある。○宿龍池：飛泉觀にある池。○水容：水流のありさま。○靈物：龍。○蜿蜒：うねうねとわだかまっている有様。○黒處：水深の深い処。○琴韻：琴の音。○鏡光：鏡のような池の光。○仙客：飛泉觀に棲んでいた道士。○稻畦：稲の田。

【構成】

『國譯漢文大成』の著者からは「支離滅裂」と酷評されているが、一応

○首聯・頷聯：飛泉觀の近景。○頸聯：飛泉觀からの遠景。○尾聯：前六句について、現在の様子を書き下して往時を追懐する。

咸陽懷古

咸陽懷古 かんようかいこ

許渾 きよこん

經過此地無窮事

此の地を經過して 無窮の事あり むきゆう

一望凄然感廢興

一望 凄然として 廢興を感ず せいぜん はいこう

渭水故都秦二世

渭水の故都 秦の二世 いすい

咸陽秋草漢諸陵

咸陽の秋草 漢の諸陵 かんよう かんよう

天空絕塞聞邊鴈

天は空しくして 絶塞に 邊鴈を聞き へんがん

葉盡孤村見夜燈

葉は尽きて 孤村に夜灯を見る

風景蒼蒼多少恨

風景は蒼々たり 多少の恨

寒山半出白雲層

寒山 半ば出ず 白雲の層

【語釈】

○咸陽：西安市咸陽、秦の都のあったところ。○無窮：感慨きわまらないこと。○凄然：寂しく痛ましいさま。○廢興：興ることと廢れること。○渭水：黄河の支流の一つ、甘肅省から、陝西省咸陽市の南、西安市の北を流れて黄河中流の潼関で合流。流域の盆地は関中と呼ばれる。○絶塞：辺境の寨、万里の長城を指す。○邊鴈：北辺から北雁。○蒼蒼：老樹が鬱蒼として茂るさま。○多少：いくばく。○寒山：葉が落ち寒々とした山。

【構成】

○首聯：自分の思い。○頷聯：比較的近景。○頸聯：遠景。○尾聯：総括して思いを風景に託す。

黄陵廟

黄陵廟

李郡玉

小孤洲北浦雲邊

小孤洲北浦雲の辺

二女明粧共儼然

二女の明粧 共に儼然たり

野廟向江春寂寂

野廟 江に向かいて春寂々

古碑無字草芊芊

古碑字無くして草芊々たり

東風近暮吹芳芷

東風 暮に近かく芳芷を吹き

落日山深哭杜鵑

落日 山に深く杜鵑 哭く

猶似含嚙望巡狩

猶お 嚙を含みて 巡狩を望むに似たり

九疑如黛隔湘川

九疑は 黛の如く 湘川を隔つ

【語釈】

○黄陵廟：洞庭湖の口にあり、舜の二妃、娥香と女英を祀る廟。湘夫人祠ともいう。○小孤洲：湖南省岳陽市近くの地名。○二女：娥香と女英。○儼然：厳かでないさま。○野廟：野原にある廟。○寂寂：寂しく静かなさま。○芊芊：草木が盛んに生い茂るさま。○東風：春風。○芳芷：香しヨロイグサ。○杜鵑：ホトトギス、蜀の望帝の魂が杜鵑になったという伝説がある。○含嚙：額に皺を作って憂えるさま。○巡狩：天子が諸国を視察して歩くこと、舜は、巡狩中に洞庭湖の近くで崩御した。○九疑：九疑山、湖南省寧遠県の南にあり、舜を葬った山。○湘川：湖南省長沙市を流れる湘江。

【構成】

○首聯：導入と極近景の叙景。○頷聯：近景の叙景。○頸聯：周囲の様子
の叙景。○第七句：作者の思い。○第八句：遠景の叙景。

晚歇湘源縣

晚しやうげんけんに湘源やす縣に歇む

張ちやう泌ひつ

烟郭遥聞向晚雞

煙郭えんかく 遥かに聞きく 晚くれに向むかう雞とり

水平舟静浪聲齊

水みづ平へいにして 舟ふね静しずかにして 浪なみ聲こゑ 齊ひとし

高林帶雨楊梅熟

高林 雨あめを帯おびて 楊梅ようばい 熟じやくし

曲岸籠雲謝豹啼

曲岸 雲うを籠こめて 謝豹しゃひやう 啼なぐ

二女廟荒宮樹老

二女ににょの廟みやうは荒あれて 宮樹みやうじゆ老らうい

九疑山碧楚天低

九疑山きうぎさんは碧あざにして 楚天ちゆうてん低ひし

湘南自古多離怨

湘南 古いにしへ自より 離怨りえん 多おほし

莫動哀吟易慘悽

莫あ動いぎん 哀吟あを動うして 慘悽さんせいを 易やすからしむること莫なかれ

【語釈】

○湘源縣：廣西省桂林市全州県。○烟郭：靄の籠めた郭。○楊梅：ヤマモモ。○謝豹：杜鵑の別名。○二女：舜帝の妃で、舜の後を追って入水した娥香と女英。二女廟は黃陵廟。○宮樹：廟中の樹木。○九疑山：湖南省寧遠県の南にあり、舜を葬った山。○楚天：楚の国(湖北省)の空。○湘南：洞庭湖の南の地方、屈原、娥香と女英のように別れの怨みを持つ物が多い。○哀吟：悲しんで詩歌を吟ずる。○慘悽：痛ましく悲しい。

【構成】

○首聯：背景の写景。○領聯：黃陵廟の回りの写景。○頸聯：二女に關係のある地の写景。○尾聯：作者の思い。

廢宅

廢宅 はいたく

吳融 ごゆう

風飄碧瓦雨摧垣

風は碧瓦を飄し雨は垣を摧く

却有隣人爲鎖門

却つて隣人の為に門を鎖ざす有り

幾樹好花閑白晝

幾樹の好花白晝に閑に

滿庭荒草易黃昏

滿庭の荒草黃昏なり易し

放魚池涸蛙爭聚

放魚の池は涸て蛙は争いて聚り

棲燕梁空雀自喧

棲燕の梁は空しく雀は自ら喧すし

不獨淒涼眼前事

ひとり淒涼たる眼前の事のみならず

咸陽一火便成原

咸陽一火便ち原と成る

【語釈】

○黃昏：たそがれ。○棲燕梁：燕が巢を作る梁。○淒涼：物寂しい。

○咸陽：西安市咸陽、秦の都のあったところ。○一火：阿房宮が項羽に放火されて灰燼に帰したること。

【構成】

○首聯：遠景の写景。○領聯：廢宅の回りの写景。○頸聯：廢宅の中と池の写景。○第七句：作者の思い。○第八句：巨景の描写。

龍泉寺絶頂

龍泉寺の絶頂りゅうせんじ ぜつちよう

方干ほう かん

未明先見海底日

未だ明けざるに先まず海底の日を見る

良久遠雞方報晨

良久ややくして遠雞まさ方に晨あしたを報ず

古樹含風長帶雨

古樹風を含みて長く雨を帯び

寒巖四月始知春

寒巖かんげん 四月始めて春を知る

中天氣爽星河近

中天氣さわやか 爽かにして星河近く

下界時豐雷雨勻

下界時豊にして雷雨ひと勻し

前後登臨思無盡

前後登臨して思いは尽くること無し

年年改換往來人

年々改め換かわる往來の人

【語釈】

○龍泉寺：河北省邢台市龍泉寺。○寒巖：高く寒い山崖。○中天：空の真ん中。○前後：たびたび。○登臨：高き二登って下を見下ろす。○往來人：寺に住む僧侶。

【構成】

○首聯：龍泉寺から見下ろした写景と、遠くからの音。○頷聯：龍泉寺の在る場所の写景。○頸聯：龍泉寺の上方と下方の写景。○尾聯：作者の思い。

和賈至早朝大明宮

賈至の「早に大明宮に朝す」に和す 王維

絳幘雞人送曉籌

絳幘の雞人 曉籌を送り

尚衣方進翠雲裘

尚衣方に進む 翠雲裘

九天閭闔開宮殿

九天の閭闔 宮殿を開き

萬國衣冠拜冕旒

万国の衣冠 冕旒を拝す

日色乍臨仙掌動

日色乍ち 仙掌に臨みて動き

香烟欲傍袞龍浮

香煙は袞龍に傍いて浮ばんと欲す

朝罷須裁五色詔

朝罷みて 須らく 五色の 詔を裁すべし

佩聲歸向鳳池頭

佩聲 歸り向う 鳳池の頭

【語釈】

○賈至：字は幼幾。洛陽の出身。開元二三年の進士。右散騎常侍に至った、このとき中書舍人。○早：早朝。朝：参内すること。大明宮：長安の都の東の内裏。○絳幘：赤い帽子。○雞人：官名、夜明けを知らせて宮殿内の百官を起こす役。○曉籌：夜明けの時刻。○尚衣：天子の衣冠を管理する職。○翠雲裘：みどりの糸で雲の模様を縫い取りした衣服。○九天：九重の天。宮殿。ここでは大明宮を指す。○閭闔：天門。ここでは大明宮の宮殿の門を指す。○冕旒：かんむりの前後にたれ下げる飾りの玉。転じて皇帝。○日色：太陽の光。○纒：やつのこと。はじめて。○仙掌：漢の武帝が宮殿の庭に立てた承露盤。○袞龍：体をうねらせた竜を刺繍した天子の礼服。○須：「すべからくべし」と読み、「ぜひしする必要がある」「しするべきだ」と訳す。裁：詔書を起草する。珮声：腰におびた佩玉の音。○鳳池：鳳凰池の略称。鳳池のそばに中書省があつたことから、中書省を指す。(唐詩選)

和賈至早朝大明宮

賈至かし つとの早だいめいきゆうに大明宮ちように朝あすすに和わす

岑しん 參じん

雞鳴紫陌曙光寒

雞しはくは紫陌しはくに鳴ないて曙光ちようこう寒さし

鶯轉皇州春色闌

鶯あしは皇州きんけつに転まじて春色しき闌たけなわなり

金闕曉鐘開萬戸

金闕きんけつの曉鐘ぎよくかい 万戸ばんこを開ひらき

玉階仙仗擁千官

玉階ぎよくかいの仙仗せんぱい 千官せんくわんを擁擁す

花迎劔珮星初落

花けんぱいは劔珮けんぱいを迎むかえ 星初せいぎめて落おち

柳拂旌旗露未乾

柳せいきは旌旗せいぎを払はいて 露ろ 未なだ乾かかず

獨有鳳皇池上客

獨ぼくり鳳皇池上ほうこうちじようの客かくのみ有あり

陽春一曲和皆難

陽春やうしんの一曲いつく 和わすること 皆難かたし

【語釈】

○賈至：字は幼幾。洛陽の出身。開元二三年の進士。右散騎常侍に至った、このとき中書舍人。○早：早朝。○朝：参内すること。○大明宮：長安の都の東の内裏。○皇州：天子の住む都。長安を指す。○紫陌：都の街路。「陌」は道路。○曙光：あけぼのの光。○玉階：宮殿の玉ぎよくをちりばめた階段。○仙仗：天子を警護する儀仗兵。○擁：擁護する。○千官：出仕するおおぜいの役人。○劔佩：腰に下げる劔と佩玉。参内する役人の正装。○星初落○夜が明けて星が見えなくなるのは、太陽が沈むように星が西の空から落ちると考えられていた。○旌旗：旗指物。天子の旗を指す。○鳳皇池：鳳池に同じ。鳳皇池のそばに中書省があったことから、中書省を指す。陽春：格調の高い歌の意。(唐詩選)

【構成】

○首聯～頸聯：朝見の儀の写景。○尾聯：和する意を言う。

酬暢當嵩山尋麻道士見寄 暢當が嵩山すうざんに麻道士を尋ね寄せらるる
に酬ゆ 盧綸ろりん

聞逐樵夫閑看棋 聞く樵夫しょうふを逐おいて閑しずかに棋きを看ると

忽逢人世是秦時 忽ち人世に逢うは是れ秦時

開雲種玉嫌山淺 雲を開き玉を種えて山の浅きを嫌い

渡海傳書怪鶴遲 海を渡り書を伝えて鶴の遅きを怪しむ

陰洞石幢微有字 陰洞いんどうの石幢せきどう微かすかに字有り

古壇松樹半無枝 古壇こだんの松樹しょうじゆ半なかば枝無し

煩君遠示青囊籙 君を煩わずらして遠く示す青囊籙せいのおろく

願得相從一問師 願はくは相従うを得て一たび師を問わん

【語釈】

○暢當：河東の人。貞元の初、太上博士となる。果州刺史に至る。○嵩山：河南省鄭州市にある山。五嶽の一つ。○麻道士：不祥。○「逐樵夫閑看棋」：暢當が言い、盧綸が聞いた言葉。晋の王質の故事。○「忽逢人世是秦時」：陶淵明『桃花源紀』。○開雲種玉：麻道士の行為。○陰洞：奥深い洞。○石幢：経文を刻んだ石の円柱。○古壇松樹：石壇を廻る松の老樹。○青囊籙：医書を入れる袋に入れた書類。ここでは、暢當が寄せられた詩のこと。○相従一問師：酬暢にしたがつて、一度、麻道士を訪問する意。

【構成】

○首聯：聞いた言葉と感想。○頷聯：行為の写実。○頸聯：写景。○尾聯：願望。

吳中別嚴士元

吳中嚴士元に別る

盧綸

春風倚棹闔閭城

春風棹に倚る闔閭の城

水國春寒陰復晴

水國春寒くして陰りて復た晴る

細雨濕衣看不見

細雨衣を湿して看れども見えず

閑花落地聽無聲

閑花地に落ちて聽くに声なし

日斜江上孤帆影

日は斜めなり江上孤帆の影

草綠湖南萬里情

草は緑なり湖南万里の情

東道若逢相識問

東道若し相識の問うに逢わば

青袍今已誤儒生

青袍今已に儒生を誤まると

【語釈】

○嚴士元：唐の馮翊臨晉（いまの陝西省華陰）の人、大理司直、京兆府戸曹掾、殿中侍御史、河南の令、刑部郎中、国子司業などをつとめた。○吳中：江蘇省蘇州市。○倚棹：船を停める。○闔閭城：吳王闔閭が都を置いた蘇州を指す。○水國：川や湖が多い土地、水郷地帯。○陰：曇る。○水閣 水辺に建てられたたかどの。○細雨：霧雨、ごく細かいあめ。○孤帆：ただ一隻の帆掛け船。○万里：非常に遠い距離。○東道：東へ向かう道。○相識：知り合い。○青袍：唐制では官位の低い八九品役人の服。○儒生：孔子の学を修める学者。

【構成】

○頷聯は閑適、他は送別の詩。
○首聯：広大な叙景。○頷聯：近景の叙景。○頸聯：遠景の叙景。○尾聯：自分の気持ち。

送王二少府貶潭・峽

王二少府の潭・峽に貶せらるるを送る

盧綸

嗟君此別意何如

嗟く君が此の別れ意何如んと

駐馬銜盃問謫居

馬を駐め杯を銜んで謫居を問う

巫峽啼猿數行淚

巫峽猿啼き數行の淚

衡陽歸雁幾封書

衡陽の歸雁幾封の書

青楓江上秋天遠

青楓江上秋天遠く

白帝城邊古木疎

白帝城邊古木疎らなり

聖代祇今多雨露

聖代祇今多雨の露

暫時分手莫躊躇

暫時を手を分つも躊躇すること莫かれ

【語釈】

○少府：官名。県の尉（檢察・警察を指揮する職）の雅名。○貶：官位をおとされて地方に流されること。○峽中：今の三峡地方。○長沙：湖南省長沙市。○嗟：感嘆詞、ああ。○意何如：胸のうちの悲しみは、いかばかりであろうか。○駐馬：両少府の馬を引きとめる。○銜杯：別れの杯を口にあてる。○謫居：配所。○巫峽：四川省巫山県の東にある峽谷。三峡の險の一つ。○衡陽歸雁：衡陽は湖南省南部の町。長沙から約二百キロほど南にある。その北にある衡山には回雁峰という峰があり、北から渡ってきた雁はここから南へは飛ばずに引き返すといわれた。○幾封書：何通の手紙。○青楓江：長沙の近くを流れる川の名、位置は不明。○聖代：りっぱな天子が治める御世。○即今：ただいま、現在。○雨露：天子の恵みをたとえる。○暫時：しばらくの間。○分手：別れること。○躊躇：去りかねてためらうこと。（唐詩選）

西塞山

西塞山

劉禹錫

西晉樓船下益州

西晉の樓船 益州より下り

金陵王氣漠然收

金陵の王氣 漠然として收まる

千尋鐵鎖沈江底

千尋の鐵鎖 江底に沈み

一片降旛出石頭

一片の降旛 石頭より出ず

人世幾回傷往事

人世 幾回か 往事を傷む

山形依舊枕寒流

山形 旧に依りて 寒流に枕す

今逢四海爲家日

今 四海 家と為るの日に逢いて

故壘蕭蕭蘆荻秋

故壘 蕭々として 蘆荻 秋なり

【語釈】

○西塞山：湖北省武昌の東にあり長江に臨む。○西晉：三国時代を統一した国。○益州：四川省成都。○金陵：南京。○王氣：王者を出す兆しのある感じ、雰囲気。○千尋：山などの非常に高いこと、谷などの非常に深いこと、ここでは長い意。○降旛：降伏の合図の旗。○石頭：金陵の西にある城。○往事：昔の事。○依舊：昔からのありさまで変わらない。○四海：四方の海、ここでは天下。○故壘：昔のとりで。○蕭蕭：物寂しくわびしいさま。○蘆荻：あしやおぎ。

(唐詩三百首)

【構成】

○首聯・頷聯：往時の写景。○第五句：追懐の情。○第六句：今の遠景の写景。○第七句：今の状況。○第八句：今の近景の写景。

早春五門西望

早春 五門より西望す

王^{おう}
建^{けん}

百官朝下五門西

百官 朝を下る 五門の西

塵起春風滿御堤

塵は春風に起りて 御堤に滿つ

黄帕蓋鞍呈了馬

黄帕^{こうぱつ} 鞍を蓋^{おお}う 呈^{てい}したる馬

紅羅纏項鬪回雞

紅羅^{こうら} 項に纏^{うなじ}う 鬪^{たたか}いて回^{かえ}る雞

館松枝重牆頭出

館松 枝 重くして 牆頭^{しょうとう}より出で

渠柳條長水面齊

渠柳^{きよりゆう} 條^{えだ} 長くして 水面^{ひと}に齊し

惟有教坊南草色

惟^ただ 教坊の南草の 色のみ有りて

古城教坊冷淒淒

古城の陰処^{いんしよ} 冷やか^{せいせい}かにして 淒々たり

【語釈】

○五門：皋門、庫門、雉門、應門、路門を言うが転じて宮城の門を指す。○朝下：退朝すること。○御堤：御溝の堤。○黄帕：黄色の旗。○黄帕：黄色い布。○呈了馬：贈呈された馬。○紅羅：紅色の薄い布。○館松：館の庭の松。○牆頭：垣根のてっぺん。○渠柳：お堀に植えてある柳。○教坊：音楽を管理する役所。○陰處：日の当たらないところ。○淒淒：寂しく痛ましいさま。

【構成】

○首聯、頸聯、頷聯は、玄宗の時代の繁栄を写し、尾聯は現在の衰退を述べる。第一句から第八句まで写景。

○首聯：輕婉。○頷聯：重大。○頸聯：輕く銖に至る。○尾聯：輕婉。

錦瑟

錦瑟 きんしつ

李商隱 りしやういん

錦瑟無端五十絃

錦瑟 きんしつ 端無くも はしな 五十絃

一絃一柱思華年

一絃 いちげん 一柱 いちちゆう 華年 かねん を思う

莊生曉夢迷蝴蝶

莊生 じやうせい の曉夢 ぎやうむ 蝴蝶 こちゆう に迷い

望帝春心託杜鵑

望帝 たうてい の春心 しゆんしん 杜鵑 とけん に託す

滄海月明珠有淚

滄海 そうかい 月 げつ 明かにして めいかにして 珠 しゆ に淚有り

藍田日暖玉生煙

藍田 らんてん 日 にち 暖 あたたか にして あたたか 玉 ぎよく は煙を生ず

此情可待成追憶

此の情 このじやう 追憶 しゆい を成すを待つべけんや

只是當時已惘然

只 ただ 是れ これ 當時 たうじ 已 ぼうぜん に惘然

【語釈】

○錦瑟…立派な瑟(おおごと)。○無端…わけもなく。○柱…ことじ。
○華年…若く華やいでいた年頃。○莊生…莊周、莊子。○迷…自分が夢で蝶になっているのか、蝶が夢で自分になっているのかということとで迷う。○蝴蝶…蝶。○望帝…蜀の望帝。春心…春を思う心。○托杜鵑…血を吐きながら悲しげに鳴く杜鵑(ホトトギス)に托す。○滄海…青い海珠…ここでは真珠。○有淚…鮫人の涙。南海に住み、水中で機(はた)を織り、泣くときは真珠の涙をこぼすという。○藍田…陝西省藍田県東南にある山の名で、名玉を産する。○日暖…(藍田の山に)陽光が射す。○生煙…五色の雲煙が生じて宝気が立ち上る。○此情…この(鬱々とした)心情。○可待…何を待とうか、待つまでもない。○當時…その頃、(妻が亡くなった)その頃。○已…とつくに、すでに。○惘然…氣落ちしてぼんやりするさま。

送人之嶺南

人の嶺南れいなんに之ゆくを送る

李り 郢えい

關山迢遰古交州

関山 迢遰ちようていたり 古交州ここしゆう

歳晏憐君走馬遊

歳晏としくれて憐む 君が 馬を走らせて遊ぶを

謝氏海邊逢姪女

謝氏しゃしかいへん海邊 姪女たじよに逢い

越王潭上見青牛

越王潭えつおうたんじよう上 青牛を見る

嵩臺月照啼猿樹

嵩台すうだい 月は照らす 啼猿ていえんの樹

石室烟涵古桂秋

石室 煙は涵ひたす 古桂こけいの秋

迴望長安五千里

長安を迴望かいぼうすれば 五千里

刺桐花下莫淹留

刺桐しとうの花下 淹留えんりゆうすること莫かれ

【語釈】

○嶺南：広東省・広西省一带。○關山：関所のある山。○迢遰：遠く遙かなさま。○古交州：古の交州（広東省広州市）。○晏：暮。○「謝氏海邊逢姪女」：「唐詩鼓吹」の故事。○「越王潭上見青牛」：「南越志」の故事。○嵩臺：高いうてな。○石室：広東省肇慶市石室山。○石室：嵩臺にある石室。○烟：霞、靄。○迴望：振り返って望み見る。○刺桐：桐に似た樹木、南海より福州に特に多いとされる。○淹留：久しく留まる。

【構成】

○首聯：嶺南での様子の想像。○頷聯：故事の写景。○頸聯：嶺南の写景。○尾聯：作者の願望。○首聯：輕婉。○頷聯：重大。○頸聯：輕く銖に至る。○尾聯：輕婉。

九日登呈劉明府

九日仙台上りゅうめいふに登り劉明府に呈す

崔曙さいちよ

漢文皇帝有高臺

漢文皇帝かんぶんこうていの高台有り

此日登臨曙色開

此の日とうりん登臨すれば曙色しよしよく開く

三晉雲山皆北向

三晉さんしんの雲山皆北に向い

二陵風雨自東來

二陵の風雨よ東自り來る

關門令尹誰能識

關門れいりんの令尹誰か能く識る

河上仙翁去不回

河上の仙翁せんおう去りて回かえらず

且欲近尋彭澤宰

且かつ近くほうたく彭沢の宰さいを尋ね

陶然一醉菊花杯

陶然とうぜんとして一たび菊花の杯に酔わんと欲す

【語釈】

○九日：九月九日、重陽の節句。○仙臺：河南省陝県にあった台、漢の文帝が河上公に謁せんとしたが、公は已に上昇していたので、望仙台を築いて祭ったとある。○明府：県令の尊称。○三晉：韓、魏、趙を言う、晉の国が三分された。○二陵：穀山（河南省西端にあり函谷関に繋がる。）にある二つの丘。○關門令尹：老子から『老子』を伝えられたという尹喜。○河上仙翁：『老子』を授けた河上公。○彭澤宰：陶淵明（彭澤県の県令であった）、此処では劉明府のこと。

【構成】

○首聯：輕婉。○頷聯：重大。○頸聯：軽く銖に至る。○尾聯：輕婉。

叢臺

叢台そうだい

李遠りおん

有客新從趙地回

客みずか有り 新たに 趙ちやうの地よ従り回かえ

自言曾上古叢臺

自みずから言かう 曾かつて 古こそうだい叢台こそうだいに上ると

雲遮襄國天邊去

雲そつこくは襄國さいこくを遮りて 天辺てんぺんに去り

樹繞漳河地裏來

樹しょうがは漳河めくを繞りて 地裏ちりより來たる

絃管變成山鳥唳

絃管げんかん 變じて 山鳥と成つて 唳さいず

綺羅留作野花開

綺羅 留まりて 野花なと作りて開く

金輿玉輦無消息

金輿きんよ 玉輦ぎよくはい 消息無く

風雨惟知長綠苔

風雨 惟ただ知る 綠苔を長ぜしむるを

【語釈】

○叢臺：戦国時代の趙が築いた楼台で河北省邯鄲県にある。○襄國：河北省邢台市邢台。○天邊：空のはて。地平線。○漳河：湖北省荊門市を流れる漳河。○絃管：弦楽器と管楽器。○綺羅：女性の美服。○金輿：金で飾った輿。帝王の乗り物。○玉輦：玉で飾った天子の車輿。

【構成】

○「客」の言葉を借りて、自分の詩とする。○頷聯：遠景。頸聯：近景。○首聯：輕婉。○頷聯：重大。○頸聯：輕く銖に至る。○尾聯：輕婉。

寒食

寒食 かんじよく

來鵬 らいほう

獨把一杯山館中

独り一杯を把る山館の中 と うち

每驚時節恨飄蓬

時節に驚く毎に飄蓬を恨む ごと ひようほう

侵塔草色連朝雨

塔を侵す草色連朝の雨 かい

滿地梨花昨夜風

地に満つる梨花昨夜の風

蜀魄啼來春寂寞

蜀魄啼き來たりて春寂寞

楚魂吟後月朦朧

楚魂吟ずる後月朦朧

分明記得還家夢

分明に記得す家に還る夢 きとく

徐孺宅前湖水東

徐孺が宅前湖水の東 じよじゆ たくせん

【語釈】

○寒食：冬至から一〇五日目。この日と前後の日、三日間は火を使うのを禁じて、火を使わない食事とする習慣があった。○山館：山村の旅館。○飄蓬：よもぎが風に吹かれるような漂泊の身。○侵塔：きざはしにはびこる。○連朝：降り続く。○蜀魄：ホトトギス。○寂寞：しずかで侘しいさま。○楚魂：秦の地に客死した楚の懷王の化した鳥。○朦朧：ぼんやりと薄れるさま。○分明：はっきりと。○徐孺：後漢の徐穉、隱逸の士として知られ「南州居士」と称された。作者と同じ地の出身。○湖水：洪州の東湖。

【構成】

○首聯：輕婉。○頷聯：重大。○頸聯：輕く銖に至る。○尾聯：輕婉。

四虚

隋宮

隋宮ずいきゆう

李商隱りしやういん

紫泉宮殿鎖煙霞

紫泉しせんの宮殿 煙霞えんかに鎖とぎされ

欲取蕪城作帝家

蕪城えんじようを取りて 帝家ていけと作さんと欲す

玉璽不縁歸日角

玉璽ぎよくじ 日角にっかくに帰すに縁よらずんば

錦帆應是到天涯

錦帆きんぱん 応まさに是れ 天涯てんやに到るべし

于今腐草無螢火

于今いま 腐草くさに 螢火けいか 無く

終古垂楊有暮鴉

終古しゅうこ 垂楊すいように 暮鴉ぼあ 有り

地下若逢陳後主

地下ちかにて 若もし 陳ちんの後主こうしゆに逢わば

豈宜重問後庭花

豈あに 宜よろしく 重おもねて 後庭花こうていかを問うべけんや

【語釈】

○隋宮：隋の煬帝が作った宮殿。○紫泉宮殿：隋の首都長安の宮殿をいう。○煙霞：かすみ。○蕪城：広陵（揚州の古名）○帝家：皇帝のすまい、つまりみやこ。○玉璽：天子の玉印。○日角：嶺の左右の骨が角のように突き出ている人相。王者たるべき着がもつという瑞相。○錦帆：豪華な錦織の帆。○天涯：天の果て。○腐草：腐った草。螢のたねとなると信ぜられた。○終古：いつまでも。○地下：よみの国。○陳後主：南北朝の末期、建廉（今の南京）に都とした陳の亡国の天子陳叔宝のこと。○後庭花：歌曲「玉樹後庭花」。

馬嵬

馬嵬 ばかい

李商隱 りしょういん

海外徒聞更九州

海外 いたずら 徒らに聞く 更に九州ありと

他生未卜此生休

他生 たせい は未だ ま 卜せず 此の生は休す

空聞虎旅鳴宵柝

空しく こりよ 虎旅の 宵柝 しょうたたく を鳴らすを聞き

無復雞人報曉籌

復 ま た けいじん 雞人の 曉籌 ぎょうちゆう を報ずる無し

此日六軍同駐馬

此の日 りくぐん 六軍 同じく馬を駐め

當時七夕笑牽牛

当時 しちせき 七夕 牽牛 けんぎゆう を笑う

如何四紀爲天子

如何 いかん んぞ しいき 四紀の天子と為りて

不及盧家有莫愁

盧家 ろか の 莫愁 ばくしゆう 有るに 及ばざるは

【語釈】

○馬嵬：陝西省興平県西方にある地名。楊貴妃が殺された所。○九州天下。世界。○他生：今生以外の諸々の世界に生まれかわること。○：考える。確かめる。○休：おしまいになる。○虎旅：宮城及び王事守衛の軍隊。○宵柝：宵は宵に就寝を警告する拍子木。○鷄人：官門を警衛し、祭祀の夜、暁を報ずる役目の者。○曉籌：籌は時刻を示す木札。○六軍：天子の軍隊。○「盧七夕笑牽牛」：玄宗と楊貴妃が七夕に長生殿に於いて、牽牛・織女が一年に一度しか会えないのは、我々の愛に及ばないと笑ったこと。○四紀：一紀は歳星（木星）が天とまわりする期間、十二年。○盧家有莫愁：盧家は魏晋時代の北方豪族八姓の一つに数えられる名門。莫愁はいにしへの洛陽の女兒の名。梁の武帝衝衍の河中の水の歌）の故事。

籌筆驛

ちゆうひつえき
籌筆驛

りしやういん
李商隱

魚鳥猶疑畏簡書

魚鳥猶お疑う簡書を畏るるかとおそ

風雲長爲護儲胥

風雲長に為に儲胥を護るとこしなちよしよ

徒令上將揮神筆

徒に上將をして神筆を揮わしめいたずら

終見降王走傳車

終に見る降王の伝車を走らすをついに

管樂有才終不忝

管樂才有りて終に忝からずついはずかし

關張無命欲何如

關張命無くして何如せんと欲すいのち

他年錦里經祠廟

他年錦里に祠廟を経ばきんりしびようへ

梁父吟成恨有餘

梁父吟成りて恨み余り有らんりようほぎん

【語釈】

○籌筆驛：四川省広元県北方にある地名。諸葛亮が討魏の軍を率いて出陣する時、この地に駐屯して作戦をねったと伝えられる。○簡書：簡書は軍中のおきてのかきつけ。○儲胥：木柵と竹槍で作る陣地の守備がき。○上将：総司令官。諸葛亮を指す。○揮神筆：はなはだ秀れた文字、あるいは文章を書くということ。「出師の表」を指す。○降王：蜀の後主劉禅をさす。○走傳車伝車とは、駅伝の馬車のこと。劉禅は降伏後、そうした馬車で洛陽へおくられた。○管樂：管は春秋時代の斉国の賢相、管仲。樂は戦国時代の燕国の卿の樂毅のこと。○関張：関羽と張飛のこと。○他年：今年以外。○錦里：蜀の都、錦官城とよばれ、四川省成都の地名。○祠廟：やしる。○梁甫吟：山東地方の民謡。諸葛亮はじめ、河南省南陽の都県に住んでいた。父の玄の死後、亮はみずから隴畝に耕し、好んで梁父吟を作ったと「三国志」の伝にある。

聞歌

歌を聞く

李商隱
りしやういん

斂笑凝眸意欲歌

笑を斂め^{おさ} 眸を凝らして^{ひとみ} 意歌わんと欲す

高雲不動碧嵯峨

高雲 動かさず^{みどり} 碧 嵯峨たり^{さが}

銅臺罷望歸何處

銅台を望むを罷め^や 何れの処にか帰る

玉輦忘還事幾多

玉輦^{ぎよくれん} 還るを忘るる事^{かえ} 幾多ぞ^{いくばく}

青冢路邊南雁盡

青冢路邊^{せいちようろへん} 南雁 尽き^{なんがん}

細腰宮裏北人過

細腰宮裏^{さいようきゆうり} 北人 過ぐ

此聲腸斷非今日

此の声 腸断するは 今日に非らず^あ

香池燈光奈爾何

香池の灯光^{なんじ} 爾を奈何せん^{いかん}

【語釈】

○嵯峨：山の峻しく石のごつごつしているさま。○銅台：曹操が河南省臨漳県に建てた銅雀台。○忘還事：宮廷に帰還することを忘れて遊蕩に耽った出来事。○幾多：どれほど。○青冢：王昭君の陵墓をいう。○南雁：南の方の郷里である漢の地に飛んで帰るカリ。故郷への雁信○細腰宮：楚の宮殿。○北人：北方人。○此聲：元、しかるべき地位にあった女性の淪落後の歌声。○腸断：非常な悲しみを。○非今日：今日だけではない。○香池：香が燃え尽きる。○奈爾何 あなたをどうしようか。

【構成】

○第三句：魏の曹操のこと。○第四句：隋の煬帝のこと。第五句：王昭君のこと。第六句：楚王のこと。

茂陵 茂陵

李商隱

漢家天馬出蒲梢

漢家の天馬 蒲梢を出ず

昔着榴花遍近郊

昔着の榴花 近郊に遍し

内苑只知銜鳳觜

内苑 只だ知る 鳳觜を銜むを

屬車無復插雞翹

屬車 復た 雞翹を 挿む無し

玉桃偷得憐方朔

玉桃 偷み得て 方朔を 憐み

金屋妝成貯阿嬌

金屋 妝い成りて 阿嬌を 貯う

誰料蘇卿老歸國

誰か料らん 蘇卿老いて 国に 帰れば

茂陵松柏雨蕭蕭

茂陵の松柏 雨 蕭々たらんとは

【語釈】

○茂陵：漢の武帝のみささぎ。○天馬：天上の馬のような駿足の馬。武帝が大宛国を撃つて得た駿馬。○蒲梢：天馬の名。ここでは大宛国。○昔着：うまごやし。○榴華：ざくろの花。○内苑：宮御苑。○銜鳳觜：鳳常は、鳳のくちばしから作るという膠。○屬車：おともする車。○雞翹：鳥の羽毛で飾り、鈴をつけた旗。○玉桃：玉のような桃の実。○憐方朔：憐は愛する。方朔は漢の武帝に仕えた文人東方朔。○金屋：美しいやかた。○阿嬌：長公主の娘、後の陳皇后。○蘇卿：漢代の忠臣蘇武。○蕭蕭：ものさびてあわれなるさま。

早秋京口旅泊

早秋京口に旅泊す

李嘉祐

移家避寇逐行舟

家を移して 寇を避け 行舟を逐う

厭見南徐江水流

見るを厭う 南徐 江水の流るるを

吳地征徭非舊日

吳地の征徭 旧日に非らず

秣陵凋弊不宜秋

秣陵の凋弊 秋に宜しからず

千家閉戸無砧杵

千家戸を閉ざして 砧杵無く

七夕何人望斗牛

七夕 何人か 斗牛を望む

惟有同時驄馬客

惟だ 同時に 驄馬の客の

偏題尺牘問窮愁

偏えに 尺牘を題して 窮愁を問う有るの

み

【語釈】

○京口：江蘇省鎮江市。○寇：揚州の刺史劉展の反乱。○南徐：江蘇省鎮江市のこと。○江水：長江。○吳地：江蘇省一帯。特に蘇州。○征徭：租税と賦役。○秣陵：金陵（南京）。○凋弊：衰え疲れる。○砧杵：砧と杵。その音。○斗牛：北斗星と牽牛星。○驄馬客：驄馬はおあ馬。作者の安否を尋ねてきた蔣侍御（不祥）を言う。○尺牘：短い手紙。○窮愁：貧窮して困り愁うこと。

（乱を避けて江蘇省に逃れた作者に対して、蔣侍御が安否を問う手紙をくれ、それに感謝し感慨を述べたもの）

【構成】

○前聯は虚実相兼ねる。語は実であって意は虚である。

晩次鄂州

晩くれに鄂州がくしゅうに次やじる

盧ろ綸りん

雲開遠見漢陽城

雲開けて遠く見る漢陽城

猶是孤帆一日程

猶こはんお是れ孤帆一日の程てい

估客晝眠知浪靜

估客こかく昼に眠り浪の静かなるを知り

舟人夜語覺潮生

舟人夜に語りて潮うしおの生ずるを覚ゆ

三湘愁鬢逢秋色

三湘さんしゅうの愁鬢しゅうびん秋色に逢い

萬里歸心對月明

万里の歸心げつめい月明に対す

舊業已隨征戰盡

旧業きゅうぎょう已に征戰に従いて尽く

更堪江上鼓鼙聲

更に堪えんや江上こへい鼓鼙の聲に

【語釈】

○次：やどる、船泊する。○鄂州：湖北省武漢市武昌。○漢陽城：武漢の漢陽の町。○估客：旅の商人。○舟人：船頭。○三湘：湖南省洞庭湖の南北、及び湘江流域一帯。○愁鬢：愁いの為に白くなった髪の毛。○秋色：秋景色。○萬里歸心：遠い故郷に帰りたい気持ち。○舊業：古くからの我が家の財産。○鼓鼙：戦中に馬上で打ち鳴らす攻め太鼓。(唐詩三百首)

【構成】

○前聯は虚実相兼ねる。語は実であつて意は虚である。

赴武陵寒食次松滋渡 武陵に赴き寒食に松滋渡に次る 寶常

杏花榆莢曉風前 杏花榆莢 曉風の前

雲際離離上峽船 雲際に離々たり 峽を上る船

江轉數程淹驛騎 江は転じて 數程 驛騎を淹むれば

楚曾三戸少人煙 楚は曾て 三戸にして 人煙 少なり

看春又過清明節 春を看て 又 清明節を過ぎ

算老重經癸巳年 老を算えて 重ねて 經 癸巳の年

幸得柱山當郡舍 幸に 柱山の郡舍に当たるを得たり

在朝長詠卜居篇 朝に在りて 長く詠ず 卜居篇

【語釈】

○武陵：湖南省常德市。○寒食：冬至から一〇五日目。この日と前後の日、三日間は火を使うのを禁じて、火を使わない食事とする習慣があった。○松滋渡：不祥。○榆莢：榆樹の果実。○雲際：雲のあるきわ。高いところ。○離離：連続しているさま。○驛騎：宿場町の乗り継ぎの馬の騎手。○楚曾三戸：楚の南公の言葉「楚三戸と雖も、秦を滅ぼすものは、必ず楚ならん」。○清明節：春分より十五日目。○重經：歳六十一。○柱山：湖南省常德市柱山。作者は朗州（湖南省常德市）の刺史であった。○郡舍：官舎。○卜居篇：居を定める歌。屈原が卜居詩を作ったことに倣う。

【構成】

○前半景、後半情。

○前聯は虚実相兼ねる。語は実であって意は虚である。

鄂州寓嚴澗宅

鄂州がくしゅうにて嚴澗の宅に寓す

元げん稹じん

鳳有高梧鶴有松

おおとり 鳳に高梧有り 鶴に松有り

偶來江外寄行踪

たま 偶たま 江外に來たりて行踪こうせきを寄すよ

花枝滿院空啼鳥

かし 花枝は院に満ちて 空しく啼く鳥

塵榻無人憶臥龍

じんとう 塵榻は人無くして 臥龍がりようを憶う

心想夜閑唯足夢

心に想う 夜閑かにして 唯だ 夢みるに 足るとた

眼看春盡不相逢

眼は 春の尽くるを看て 相逢あいあわず

何時最是思君處

何れの時か 最も是れ 君を思ふ處

月入斜窗曉寺鐘

月は斜窓に入る 曉寺ぎょうじの鐘

【語釈】

○鄂州：武昌（湖北省武漢市）。○鮫澗：未詳、鄂州で鮫澗の家に宿泊したときの作、主人の鮫澗はたまたま不在であった。○高梧：おおぎり。○行踪：足跡、行方。○塵榻：塵にまみれた寝椅子。○臥龍：隠れ住む龍、高潔な隠者、嚴澗のこと。是：be 動詞にあたり「コレ」と訓読する。

【構成】

○前聯は虚実相兼ねる。語は実であって意は虚である。

九日齊山登高

九日 齊山せいざんに登高とす

杜と牧ぼく

江涵秋影鴈初飛
與客攜壺上翠微

江は秋影を涵ひたして 鴈かり初めて飛ぶ
客かくと壺を携えて 翠微すいびに上る

塵世難逢開口笑

塵世じんせい逢い難し 口を開いて笑うに

菊花須插滿頭歸

菊花すべか 須らく 滿頭まんとうに插さして帰るべし

但將酩酊酬佳節

但まさだ 將まに 酩酊めいていして 佳節かせつに酬むくい

不用登臨怨落暉

用といず 登臨とうりんして 落暉らつきを怨むを

古往今來只如此

古往今來こおうこんらい 只かだ此くの如し

牛山何必獨霑衣

牛山 何ぞ 必ずしも 独り 衣うらおを霑うるさん

【語釈】

○九日：陰曆九月九日の重陽の日。○齊山：江州と南京の中間点で、長江南岸の東南3キロメートルのところにある。○登高：九月九日の重陽の日の風習で、高い山に登り、家族を思い、菊酒を飲んで厄災を払う習わし。○江：長江のこと。○涵：水にひたす。○秋影：秋げしき。○翠微：山の八合目あたり。○塵世：俗世間。○開口笑：『莊子』の盗跖の言。○菊花：邪気を祓うとされるキクの花。○滿頭：頭いっぱい。○酩酊：ひどく酔う。佳節：おめでたい日。○登臨：山に登り水に臨む。○落暉：落日、沈む夕日の輝き。○古往今來：昔から今まで。○牛山：現・山東省臨淄県の南にある山。『韓詩外傳』の齊の景公の故事)

【構成】

○前聯は虚実相兼ねる。語は実であつて意は虚である。

贈王尊師

王尊師に贈る

姚合

先生自說瀛洲路

先生 自ら説く瀛洲の路

多在青松白石間

多く青松は白石の間に在りと

海岸夜中常見日

海岸 夜中常に日を見

仙宮深處却無山

仙宮 深き処 却って 山無し

犬隨鶴去遊諸洞

犬は 鶴に随いて去りて 諸洞に遊び

龍作人來問大還

龍は 人と作り来りて 大還を問う

今日偶聞塵外事

今日 偶たま聞く 塵外の事

朝簪未擲復何顔

朝簪 未だ 擲たず 復た 何んの 顔せぞ

【語釈】

○王尊師：不詳。尊師は道士の敬称。○瀛洲：海中の仙山、三神山（蓬萊、方丈、瀛洲）のひとつ。○仙宮：仙人の宮殿。○大還：仙薬を作る方法の一つ。○塵外：俗世間を離れた所。○朝簪：官位を示す冠を止めるピン。

【構成】

○首聯、頷聯、頸聯は、王尊師のことを述べる。尾聯は自分の情を述べる。

○前聯は虚実相兼ねる。語は実であって意は虚である。

贈王山人

王山人に贈る

許渾

賞酒攜琴訪我頻

酒を貰おぎり琴を携えて我を訪れること頻しきりなり

始知城市有閑人

始めて知る城市に閑人かんじん有るを

君臣藥在寧憂病

君臣薬在り寧なんぞに病を憂うれえん

子母錢成豈患貧

子母 錢成りて豈あに貧を患うれえん

年長每勞推甲子

年長じて毎つねに甲子こうしを推すを勞し

夜寒初共守庚申

夜寒くして初めて共に庚申こうしんを守る

近來聞説燒丹處

近來聞説きくならく丹たんを燒く処

玉洞桃花萬樹春

玉洞の桃花 万樹の春なりと

【語釈】

○王山人：不祥、山人は隱者。○貰：酒をツケで買うこと。○閑人：余裕ある人。○君臣藥在：あらゆる薬が揃っていること。○子母錢成：『搜神季記』の記事。使うと戻ってくるので何時までも使える。○勞推甲子：年齢を尋ねられたときに、答えるのに苦労する。○守庚申：庚申の日に眠らないでいること。庚申待。○聞説：聞くとともによれば。○丹：仙薬。仙人が作るもの。○玉洞：仙人の住む洞。王山人の居を言う。

【構成】

○前聯は虚実相兼ねる。語は実であって意は虚である。

湘中送友人

湘中しやうちゆうに友人を送る

李り
頻ひん

中流欲暮見湘煙

中流暮んと欲して 湘煙しやうえんを見る

岸葦無窮接楚田

岸葦がんに窮まり無くして 楚田そでんに接す

去雁遠衝雲夢雪

去雁きよがん遠く衝く 雲夢うんぼうの雪

離人獨上洞庭船

離人りじん独り登る 洞庭の船

風波盡日依山轉

風波 尽日 山に依りて轉じ

星漢通宵向水連

星漢せいかん 通宵つうしやう 水に向つて連なる

零落梅花過殘臘

零落れいらくせる梅花 殘臘ざんろうを過ぎ

故園歸去醉新年

故園に歸り去りて 新年に酔わん

【語釈】

○湘中：洞庭湖の南、湘江の流域。○湘煙：湘江にかかる靄。○楚田：楚の地の田。○雲夢：湖北省安陸県の南にあった沼沢。○離人：離れていく友人。○星漢：銀河。○通宵：一晩中。○零落：草木が枯れて落ちること。○殘臘：陰曆十二月。

【構成】

○前聯は虚実相兼ねる。語は実であつて意は虚である。

元達人上人種藥

げんたつしょうにんくすり
元達上人薬を種ゆ

ひじつきゅう
皮日休

雨滌煙鋤偃破籬

そそ
雨に滌ぎ煙に鋤き破籬に偃す

紺牙紅甲兩三蛙

こんが こうこう りょうさんけい
紺牙紅甲兩三蛙

藥名却笑桐君少

とくくん
薬名却って笑う桐君の少きを

年紀翻嫌竹祖低

ちくそ
年紀翻って嫌う竹祖の低きを

白石淨敲蒸朮火

きよ きた たた じゆつ む
白石淨く敲く朮を蒸す火

清泉閑洗種花泥

しずか
清泉閑に洗う花を種うる泥

怪來昨日休持鉢

怪しみ來たる昨日鉢を持つを休むるを

一尺雕胡似掌齊

ちやうこ しょう ひと
一尺の雕胡掌の斉しきに似たり

【語釈】

○元達人上人：不祥。○偃：伏せる、寝転ぶ。○破籬：壊れたまがき。
○紺牙：紺色の芽。○紅甲：紅色の芽。○畦：五十畝。○桐君：黄帝
時の医師で浙江省桐廬県の東山で桐樹の下に廬を結んで薬草を採つ
た。その「薬草目録」を言う。○年紀：年齢。○竹祖：『漢武帝内傳』
封君達と言う人物が水銀を飲んで、百余歳で故郷に帰ったが二十歳
の人のように見て、青牛に乗り、竹管の薬をもって人々を救ったので
竹祖と呼ばれた。○朮：薬名。○持鉢：托鉢する。○雕胡：まこも。

【構成】

○前聯は虚実相兼ねる。語は実であつて意は虚である。

前虚後実

黄鶴樓

黄鶴樓こうかくろう

崔顥さいこう

昔人已乘黄鶴去

昔人せきじん 已こに 黄鶴こうかくに乗じて去り

此地空餘黄鶴樓

此の地 空しく余す 黄鶴樓こうかくろう

黄鶴一去不復返

黄鶴こうかく 一たび去りて 復また返らず

白雲千載空悠悠

白雲 千載 空しく悠々

晴川歷歷漢陽樹

晴川 歷々れきれきたり 漢陽かんようの樹

芳草萋萋鸚鵡洲

芳草 萋々せいせいたり 鸚鵡おうむの洲

日暮鄉關何處是

日暮にちぼ 鄉關きょうかん 何れの処か是れなる

煙波江上使人愁

煙波 江上 人をして 愁えしむ

【語釈】

○昔人：昔の人、ここでは辛氏の酒屋を訪れた仙人を指す。○空：ただうだけ。ただうばかり。○余：残っている。○千載：千年。○悠悠：ゆったりとのどかにしているさま。○晴川：晴れ渡った長江の流れ。歴歴：はつきりと見えるさま。○漢陽：長江をはさんで、武昌の対岸にある町。○芳草：香りのよい草花。○萋萋：草が盛んに茂っているさま。○鸚鵡洲：湖北省武漢市武昌区黄鵠磯の西、長江の中にある中洲。○日暮：日暮れ。○鄉關：ふるさと。○何処是：どの辺りがそれ（故郷）だろうか。○煙波：もやの立ちこめた水面。○江上：長江のほとり。使人愁：私の胸に、望郷の思いを起こさせる。

（唐詩選）

自蘇臺至望亭驛人家盡空 蘇台自り望亭駅に至りる。人家尽く空し
李嘉祐 りかゆう

南浦菰蒲覆白蘋

なんぼ 南浦の菰蒲 白蘋を覆う

東吳黎庶逐黃巾

とうご 東吳の黎庶 黃巾に逐わる

野棠自發空流水

やとう 野棠 自ら発き 空しく水に流れ

江燕初歸不見人

かうえん 江燕 初めて歸りて 人を見ず

遠樹依依如送客

遠樹 依依として客を送るが如く

平田渺渺獨傷春

へいでん 平田 渺々として 独り春を傷む

那堪回首長洲苑

な 那ぞ堪えんや 首を長洲の苑に回すに

烽火年年報虜塵

ほうか 烽火 年々 虜塵を報ず

【語釈】

○蘇臺：姑蘇台、蘇州西南にあり、吳の宮殿のあったところ。○望亭驛：不祥。○南浦：江西省南昌県の西南の地名。○菰蒲：まこも。○白蘋：白いテンジソウ。○東吳：蘇州。○黎庶：庶民。○黃巾：反乱軍、黃巾の乱を仮託したもの。○野棠：野生の海棠。○江燕：水辺にいる燕。○依依：細くなよよとしているさま。○渺渺：広く果てしないさま。○長洲苑：姑蘇の南、太湖の北にある景勝の地。○烽火：のろし火。○虜塵：反乱者の侵寇。

（肅宗の時に、劉辰・張景が乱を起こし、浙江省の西部を荒らしたときの作）

與僧話舊

僧と旧を語るかた

劉滄りゅう そう

巾舄同時下翠微

巾舄きんせき 同時にすいび 翠微を下る

舊遊因話事多違

旧遊 語るに因りてよ 事多く違たがう

南朝古寺幾僧在

南朝の古寺 幾僧か 在る

西嶺空林唯鳥歸

西嶺の空林 唯だ鳥のみ 帰る

莎徑晚煙凝竹塢

莎徑さけいの晚煙 竹塢ちくりに凝り

石池春水染苔衣

石池せきちの春水 苔衣たいいを染む

此時相見又相別

此の時 相見て 又相別る

即是關河朔鴈飛

即ち是れ 関河かんか 朔鴈さくがん飛ぶ

【語釈】

○巾舄：頭巾と二枚底の履、身辺を言う。○翠微：緑の山の中腹。○舊遊：昔の友達。○空林：人氣の無い寂しい山。○莎徑：ハマスゲの茂った道。○晚煙：ゆうもや。○竹塢：高いところにある竹藪。○苔衣：苔。○關河：関山と河川。○朔鴈：北方の雁、北に帰る雁。

長洲懷古

長洲懷古

劉滄

野燒空原盡荻灰

野燒空原 盡く荻灰

吳王此地有樓臺

吳王 此の地に 樓台有り

千年事往人何在

千年の事往きて 人何くにか在る

半夜月明潮自來

半夜 月明かにして 潮 自ら來たる

白鳥影從江樹沒

白鳥 影は 江樹に従いて沒し

清猿聲入楚雲哀

清猿 声は楚雲に入りて哀しむ

停車日晚薦蘋藻

車を停め 日は晩れて 蘋藻を薦むれば

風靜寒塘花正開

風は靜かにして寒塘 花 正に開く

【語釈】

○長洲：江蘇省蘇州市西南にある。吳王闔閭の遊苑。○野燒：野火が
焼き尽くす。○空原：何もない野原。○荻灰：蘆荻の焼けた灰。○吳
王：闔閭。○江樹：川辺の樹木。○清猿：清い猿の声。○楚雲：楚の
地の雲。○蘋藻：かたばみ。粗末な捧げ物として用いる。○寒塘：
寒々とした堤。

煬帝行宮

煬帝ようだいの行宮あんぐう

劉りゅう 滄そう

此地曾經翠輦過

此の地曾て経たりすいれん 翠輦の過ぐるを

浮雲流水竟如何

浮雲 流水 竟ついでに如何いかん

香銷南國美人盡

香は南国に銷しょうして 美人 尽しゆうき

怨入東風芳草多

怨みは東風に入りて 芳草 多し

殘柳宮前空露葉

殘柳ざんりゆう 宮前に 露葉ろよう 空しく

夕陽江上浩煙波

夕陽せきよう 江上こうじように 煙波えんぱ 浩ひろし

行人遙起廣陵思

行人こうじん 遙かに起こす 廣陵こうりようの思

古渡月明聞棹歌

古渡こと 月明かにして 棹歌とうかを聞く

【語釈】

○翠輦：綠色に塗った天子の手車。○殘柳：煬帝が植えさせた柳の木で、残っている物。○煙波：水上にかかる靄。○江上：長江の上。江都（可南府）の長江の上。○行人：旅人。○廣陵：揚州、煬帝が殺され墓のあるところ。○廣陵思：晉の嵇中散は斬られるとき、広陵秘曲を奏したこと。○棹歌：舟歌。

經故丁補闕郊居

故丁補闕が郊居を經

許渾

死酬知己道終全

死して知己に酬い道終に全し

波暖孤冰且自堅

波暖にして孤冰且お自ら堅し

鵬上承塵纒一日

鵬は塵承に上りて纒かに一日

鶴歸華表已千年

鶴は華表に歸りて已に千年

風吹藥蔓迷樵徑

風は藥蔓を吹いて樵徑を迷わせ

水暗蘆花失釣船

水は蘆花に暗くして釣船を失う

四尺孤墳何處是

四尺の孤墳何れの処か是れなる

闔閭城外草連天

闔閭城外草天に連なる

【語釈】

○丁補闕：不祥。○「死酬知己」：『史記』「刺客列伝」。○孤冰：一
つだけの氷。○鵬：みみずく。○塵纒：水草の模様を画いた天井。○
「鵬上承塵」：『搜神記』。○華表：日本の鳥居のようなもの。○鶴
歸華表：丁令威が鶴に化して華表に帰った。○藥蔓：藥草のつる。
○樵徑：樵の通るような細道。○闔閭城：蘇州。

【構成】

○前半は丁補闕のことを述べ、後半は今見る郊居の叙景を述べる。

贈蕭兵曹

蕭兵曹に贈る

李嘉祐

廣陵堤上昔離居

廣陵堤上昔離居す

帆轉瀟湘萬里餘

帆は瀟湘に転ず万里余

楚澤病時無鵬鳥

楚沢病む時鵬鳥無く

越郷歸去有鱸魚

越郷帰り去りて鱸魚有り

潮生水國蒹葭響

潮は水国に生じて蒹葭響き

雨過山城橘柚疎

雨は山城を過ぎて橘柚疎なり

聞説攜琴兼載酒

聞説く琴を携え兼ねて酒を載すと

邑人爭識馬相如

邑人争か馬相如を識らんや

【語釈】

○蕭兵曹：不祥。○廣陵：江蘇省揚州市。○瀟湘：洞庭湖の南の地方で、瀟水と湘水が合流する地の一带。○楚澤：瀟湘の地帯。○病時：屈原のような病。○鵬鳥：みみずく。漢の買誼が鵬で占いをたて、その通り忽ち死んだ故事による。○越郷：故郷の揚州。○歸去有鱸魚：晉の張翰の故事による。○蒹葭：オギとアシ。○橘柚：タチバナとユズ。○邑人：村人。○馬相如：司馬相如、蕭兵曹をたとえて言う。

酬張芬赦後見寄

張芬が赦後に寄せらるるに酬ゆ

司空曙

紫鳳朝銜五色書

紫鳳朝より銜む五色の書

陽春忽布網羅除

陽春忽ち布いて網羅除かる

已將心變寒灰後

已に心は寒灰の後に變ずるを將つて

豈料光生腐草餘

豈に料らんや光生は腐草の余に生ぜんとは

建水風煙收客淚

建水の風煙客淚を收め

杜陵花竹夢郊居

杜陵の花竹郊居を夢めむ

勞君故有詩人贈

君を勞して故に詩人の贈あり

欲報瓊瑤愧不如

瓊瑤に報いんと欲して如しからざるを愧ず

【語釈】

○張芬：不祥。○赦後：司空曙が長沙に託せられていたときに、大赦があり、長安に帰る事になった後。○紫鳳：木で作った鳳。○「朝銜五色書」：後趙の石虎が、罪人赦免についての詔書を五色の紙を用いて木鳳の口に含ませて頒布した故事。○陽春：生き返るの意味。○網羅：法の網の喩え。○寒灰：火の無い灰。冷灰。○光生：恩光。○腐草：腐った草のような流謫の身。○建水：広東省雲浮市羅定市。○風煙：風と靄。○杜陵：長安の東南の地名。○郊居：郊外の住まい。○瓊瑤：美玉、ここでは酬張から贈られた詩。

【構成】

○首聯・頷聯・頸聯は自分の思いを述べ、尾聯は張に報いることを述べる。

答寶拾遺臥病見寄

寶拾遺とうしゅういが病に臥して寄せらるに答ゆ

包ほう
詰きつ

今春扶病移滄海

今春いまはる 病やまいを扶たすけ 滄海そうかいに移り

幾度承恩對白花

幾度いくたびか 恩おんを承うけ 白花はくわに對す

送客屢聞簷外鶻

客きやくを送りて 屢しばしば聞きく 簷外えんがいの鶻じやく

銷愁已辨酒中虵

愁しゆうを銷けして 已いに弁わず 酒中しゆうちゆうの虵だ

瓶收枸杞懸泉水

瓶びんには 枸杞くこけんせんの水みづを収とめ

鼎鍊芙蓉伏火砂

鼎ていには 芙蓉ふようふくか伏火ふくかの 砂すなを鍊ねる

誤入塵埃牽吏役

誤まちがって 塵埃じんあいに入り 吏役しえきに牽ひかる

羞將簿領到君家

恥はずらくは 簿領ぼりようを將もつて 君が家に到しを

【語釈】

○寶拾遺：徳宗の時に左拾遺であった寶羣。○滄海：大海、ここでは江東。○承恩：寶羣から恩を受けた。○簷外鶻：『世説新語』烏雀騒いで行人至る。○酒中虵：『晋書』「樂廣傳」病が快方に向かつていることを言う。○枸杞：なす科の植物、葉草、根と葉を葉草にする。○懸泉：滝の水。○「枸杞懸泉水」：『續神仙傳』。○「鍊芙蓉伏火砂」：芙蓉砂というものを処理して仙薬を作る。○塵埃：俗世間。○役人。○簿領：帳簿

【構成】

○首聯・頷聯は情想を述べ、頸聯、尾聯は感興を述べる。

寄樂天

樂天に寄す

元 積げん じん

榮辱升沈影與身

榮辱えいじょく 升沈しょうちん 影と身と

世情誰是舊雷陳

世情せじょう 誰だたれ 是れ 旧雷陳きゅうらいちん

唯應鮑叔猶憐我

唯だた 応にまさ 鮑叔ほうしゆく 猶お 我を憐むべし

自保曾參不殺人

自みずから保す 曾參が人を殺さざること

山入白樓沙苑暮

山は白樓に入る 沙苑さえんの暮

潮生滄海野塘春

潮うしおは滄海そうかいに生ず 野塘やとうの春

老逢佳景唯惆悵

老かいて 佳景かけいに逢いて 唯だ 惆悵ちようちようす

兩地各傷無限神

兩地りょうち 各おのの 傷あましむ 無限しんの神

【語釈】

○樂天：白居易。○榮辱：毀誉褒貶。○榮辱：栄えることと衰えること。○影與身：影が身に従うこと。○雷陳：雷義と陳重との節の固い交わり。○鮑叔：管鮑の交わりを言う。○曾參不殺人：「曾參人を殺す」『戦国策 秦策上』無実の罪を負ったこと。○白樓：同州（陝西省渭南市）にあった高殿。○沙苑：同州の砂浜。○暮：夕暮れ。○滄海：青海。○野塘：野原の堤。○惆悵：悲しみもだえる。

【構成】

○首聯・頷聯は情想を述べ、頸聯、尾聯は感興を述べる。

秋居病中

秋居の病中

雍陶

幽居悄悄何人到

幽居 悄悄として 何人か到らん

落日清涼滿樹梢

落日 清涼として 樹梢に満つ

新句有時愁裏得

新句 時に有りて 愁裏に得

古方無效病來拋

古方 效無くして 病來 拋つ

荒簷數蝶懸蛛網

荒簷の數蝶 蛛網に懸かり

空屋孤螢入燕巢

空屋の孤螢 燕巢に入る

獨臥南窗秋色晚

独り 南窓に臥す 秋色の晚

一庭紅葉掩衡茅

一庭の紅葉 衡茅を掩う

【語釈】

○幽居：人里離れたわび住まい。○悄悄：ひっそりとして物音のしないさま。○清涼：清くて清々しいさま。○樹梢：木のこずえ。○新句：新しい詩。○愁裏：愁いのうち。○古方：古い処方薬。○病來：病気になるってから。○荒簷：荒れたのきば。○蛛網：蜘蛛の巣。○秋色：秋景色。○衡：冠木門、上に横木を渡しただけの粗末な門。○茅：茅葺きの粗末な家。

【構成】

○典型的な交股格の詩である。首聯と尾聯で一絶をなし、頷聯、頸聯で一絶をなす。

○首聯・頷聯は情想を述べ、頸聯、尾聯は感興を述べる。

送崔約下第歸揚州

崔約さいやくが下第かだいして揚州ようしゅうに帰るを送る 姚合ようごう

滿座詩人吟送酒

滿座の詩人吟じて酒を送る

離城此會亦應稀

城を離るる此の会亦またまさ応まれに稀なるべし

春風下第時稱屈

春風に下第して時に屈くつと稱し

秋卷呈親自束歸

秋卷しゅうけん 親ていに呈せんとして 自ら束みずかねて帰るつか

日晚山花當馬落

日は晩れて 山花馬に當つて落ち

天陰水鳥傍船飛

天は陰りて 水鳥船に傍いて飛ぶ

江邊道路多苔蘚

江辺道路苔蘚多し

塵土無由得上衣

塵土由し無し 衣に上るを得るに

【語釈】

○崔約：不詳。○下第：科擧に落第すること。○揚州：江蘇省揚州市。
○時稱屈：(世の人は)不当さを取りざたする。○秋卷：秋に取りまとめた作品。○苔蘚：こけ。○無由：てがかりがない。○上衣：(舞い上がって)衣に着く。

【構成】

○首聯・頷聯は情想を述べ、頸聯、尾聯は感興を述べる。

旅館書懷

旅館にて懷おもひを書す

劉りゅう
滄そう

忽看庭樹換風煙

忽ち看る 庭樹の 風煙を換うるを

兄弟飄零寄海邊

兄弟ひょうれい 飄零して 海邊に寄す

客計倦行分陝路

客計行に倦む 分陝の路

家貧休種汶陽田

家貧しくして 種うるを休む 汶陽の田

雲低遠塞鳴寒鴈

雲は遠塞えんさいに低れて 寒鴈かんがん 鳴き

雨歇空山噪暮蟬

雨は空山やに歇んで 暮蟬ぼせん 噪ぐ

落葉蟲絲滿窗戶

落葉ちゅうし 虫糸 窓戸に満つ

秋堂獨坐思悠然

秋堂に独坐して 思おもいは悠然たり

【語釈】

○庭樹換風煙：庭の木のあたりの風も靄も（季節が変わって）すっかり変わってしまった。○飄零：漂泊と零落、おちぶれて彷徨うさま。
○客計：旅の計画。○分陝：陝州、今の河南省陝県。○汶陽：山東省寧陽県（作者の出身地？）。○遠塞：遠くの寨。○空山：葉の落ちた人気の無い山。○窗戸：窓。○悠然：遙かなさま、憂鬱な物思い。

【構成】

○首聯・頷聯は情想を述べ、頸聯、尾聯は感興を述べる。

穎州客舍

えいしゅう かくしや
穎州の客舍

よう き
姚揆

素琴孤劔尚閑遊

そきん こけん な かんゆう
素琴 孤劔 尚お 閑遊す

誰共芳尊話唱酬

誰と共にか 芳尊を話つて 唱酬せん
しやうしゅう

郷夢有時生枕上

きやうむ ちんじやう
郷夢 時有りて 枕上に生じ

客情終日在眉頭

かくじやう びとう
客情 日終るとき 眉頭に在り

雲拖雨脚連天去

うきやく ひ つなな
雲は 雨脚を拖いて 天に連つて去り

樹夾河聲繞郡流

かせい さしはさ めぐ
樹は 河声を夾んで 郡を繞りて流る

回首帝京歸未得

首を帝京に回らせども 帰ること 未だ得ず
めぐ

不堪吟倚夕陽樓

堪えず 吟じつつ 夕陽の樓に倚るに
よ

【語釈】

○穎州：河南省汝陰郡。○客舍：旅館。○素琴：飾りのない琴。○閑遊：あてどな旅。○芳尊：良い酒。○唱酬：詩を互いに贈答する。○郷夢：故郷の夢。○客情：旅の愁いの情。○眉頭：眉の上。○拖：伴う。○帝京：長安の都。

【構成】

○首聯・頷聯は情想を述べ、頸聯、尾聯は感興を述べる。

春日長安即事

春日長安即事しゅんじつ

崔櫓さいろ

一百五日又欲來

一百五日 又 来たらんと欲す

梨花梅花參差開

梨花 梅花 參差さんしとして開く

行人自笑不歸去

行人 自おのずから笑う 歸り去らざるを

瘦馬獨吟真可哀

瘦馬そうばに 独り吟じて 真に哀れむべし

杏酪漸香鄰舍粥

杏酪きょうらく 漸く香し 鄰舍りんしゃの粥かゆ

榆煙將變舊爐灰

榆煙ゆえん 將まさに變ぜんとす 旧炉の灰

玉樓春暖笙歌夜

玉樓 春暖かなり 笙歌しやうかの夜

肯信愁腸日九迴

肯あえて信ぜんや 愁腸しゆうちやうの 日に九迴きゆうかいするを

【語釈】

○一百五日：寒食の日(冬至から数えて百五日目)。○參差：入り乱れるさま。○行人：旅人。○瘦馬：やせ馬(に乗っている作者)。○杏酪：杏の種を粉末にして飴を加えてとろりとさせたもの、寒食の終わった日に粥にして食べる。○榆煙：寒食が終わった後、榆の木に灯された火の煙。○玉樓：美しい楼台。○簫歌：笙の調べと歌声。○愁腸日九迴：調が一日に九回ねじれるような深い憂い。

【構成】

○首聯・頷聯は情想を述べ、頸聯、尾聯は感興を述べる。

江際

江際こうさい

鄭谷ていこく

杳杳漁舟破暝煙

杳々たる漁舟 暝煙を破る

疎疎蘆葦舊江天

疎々たる蘆葦 旧江の天

那堪流落逢搖落

那ぞ堪えん 流落して 搖落に逢うに

可得漕然是偶然

得べけんや 漕然 是れ 偶然なるを

萬頃白波迷宿鷺

万頃の白波 宿鷺を迷わせ

一林黃葉送秋蟬

一林の黄葉 秋蟬を送る

兵車未息年華促

兵車 未だ息まず 年華促る

早晚閑吟向瀆川

早晚 閑吟して 瀆川に向わん

【語釈】

○江際：江蘇省揚州市。○杳杳：遠く遙かなさま。○暝煙：遙かな水上の靄。○疎疎：まばらなさま。○蘆葦：アシとヨシ。○流落：落ちぶれて流浪すること。○搖落：木の葉が枯れ落ちること。○漕然：涙の流れおちるさま。さめざめ。○迷宿鷺：鷺も白く波も白いので宿る所に迷う。○萬頃：非常に広いこと。一頃は百畝。○兵車：黄巢の乱。○年華：春の光。ここでは新年。○瀆川：長安を流れる川。ここでは長安のこと。

【構成】

○首聯・頷聯は情想を述べ、頸聯、尾聯は感興を述べる。

中年 中年

鄭谷

漠漠秦雲淡淡天

漠々たる秦雲 淡淡たる天

新年景象入中年

新年の景象 中年に入る

情多最恨花無語

情多くして 最も恨む 花に語無きを

愁破方知酒有權

愁い 破れて 方に知る 酒に權有るを

苔色滿牆思故第

苔色 牆に満ちて 故第を思い

雨聲入夜憶春田

雨声 夜に入つて 春田を憶う

衰遲自喜添詩學

衰遲 自ら喜ぶ 詩学を添うるを

更把前題改數聯

更に 前題を把りて 數聯を改む

【語釈】

○中年：五十歳。○漠漠：果てしなく広がるさま。○秦雲：長安方面にかかる雲。○淡淡：うつすらとしたさま。○情：物に感ずる感受性。無語：言葉を理解しない。方：やっと、始めて。○權：うわべだけの力。○故第：元の屋敷。○春田：春になって耕作に取りかかること。○衰遲：何もし得ないまま老衰してしまうこと。○前題：前に作った詩。

【構成】

○首聯・頷聯は情想を述べ、頸聯、尾聯は感興を述べる。

秋日東郊作

秋日東郊の作しゅうじつとうこう

皇甫冉こうほぜん

閑看秋水心無事

しずか 閑かに しゅうすい 秋水を看て 心無事なり

臥對寒松手自栽

ふ 臥して かんしょう 寒松に對して 手 みずか 自ら栽ゆ

廬岳高僧留偈別

ろがく 廬岳の高僧 偈を留めて別れ

茅山道士寄書來

ちざん 茅山の道士 書を寄せて來たる

燕知社日辭巢去

燕は社日を知りて 巢を辭して去り

菊爲重陽冒雨開

菊は重陽の為に 雨を冒して開く

淺薄將何稱獻納

せんぱく 淺薄 何を將つて けんのう 獻納と稱せん

臨岐終日自徘徊

岐に臨みて 終日 自ら徘徊す

【語釈】

○東郊：東の郊外の野原。○閑：のんびりとしたさま。○廬嶽：廬山。江西省九江の南にある山，名刹，東林山がある（ここでは、高僧に付いての修飾語）。○茅山：江蘇省句容県の南にある山、ここでは、道士についての修飾語。まる○社日：土地の神を祭る日、春社、秋社の二回がある。○獻納：補闕、拾遺の官にあるもの。○臨岐：分かれ道にくる、如何にすべきかまようこと。

【構成】

○前聯は専ら情思いを述べ、後聯は景物を略徐し、結句に於いて情思いを述べたもの。

過乗如禪師蕭居士嵩丘蘭若

乗如禪師・蕭居士が嵩丘の蘭若

に過ぎらる

王維

無着天親弟與兄

無着 天親弟と兄と

嵩丘蘭若一峰晴

嵩丘の蘭若一峰晴る

食隨鳴磬巢鳥下

食は鳴磬に随いて 巢鳥下り

行踏空林落葉聲

行は空林を踏みて 落葉 声あり

进水定侵香案濕

进水は定めて 香案を侵して 湿い

雨花應共石牀平

雨花は 応に 石牀と共に 平かなるべし

深洞長松何所有

深洞の長松 何の有る所ぞ

儼然天竺古先生

儼然たり 天竺の古先生

【語釈】

○乗如禪師・蕭居士…不祥。○嵩丘…嵩山、中国河南省登封市にある山岳群、五岳のひとつ。○蘭若…寺院のこと。○鳴磬…石の板。食事などの合図に打ち鳴らす。○巢鳥下…巢にいる鳥が下りて来る。○空林…ひとけのない林。○进水…ほとばしり出る水。○香案…香炉をのせておく机。○雨花…雨のように降る花。○石牀…石でつくった寝台。○何所有…その下に何があるか。○儼然…さながら、そっくり。○天竺古先生…釈迦如来のこと。

(唐詩選)

【構成】

○前聯は専ら情思いを述べ、後聯は景物を略徐し、結句に於いて情思を述べたもの。

送友人遊江南

友人の江南に遊ぶを送る

歌 漳

遠別悠悠白髮新

遠別 悠々として 白髮新たなり

江潭何處是通津

江潭 何れの処か 是れ 通津

潮聲偏懼初來客

潮聲 偏えに懼れしむ 初來の客

海味唯甘久住人

海味 唯だ甘し 久住の人

漠漠煙光前浦晚

漠々たる煙光 前浦の晩

青青草色定山春

青青たる草色 定山の春

汀洲更有南迴雁

汀洲 更に南迴の雁有り

亂起聯翩北向秦

亂れ起ち 連翩として北のかた秦に向う

【語釈】

○江南：浙江省、江蘇省一带。○悠悠：遠く遙かなさま。○江潭：江は浙江省、潭は潭州（湖南省長沙市一带）。○通津：四方八方に繋がっている渡し場。○漠漠：広々として果てしないさま。○煙光：雲、霞、霧等の様子。○定山：浙江省杭州市にある山。○汀洲：中洲。○聯翩：鳥の連なって飛ぶさま。○秦：長安。

【構成】

○前聯は専ら情思いを述べ、後聯は景物を略徐し、結句に於いて情思いを述べたもの。

送別友人

友人に送別す

姚合ようごう

獨向山中覓紫芝

独り 山中むかに向いて 紫芝ししを覓む

山人勾引住多時

山人勾引して 住じゅうすること 多時なり

摘花浸酒春愁盡

花を摘み 酒に浸せば 春愁しゅんしゅう 尽き

燒竹煎茶夜臥遲

竹を燒き 茶を煎にじて 夜臥ふすること遅し

泉落林梢多碎滴

泉は林梢りんしょうに落ちて 碎滴さいてき 多く

松生石底足旁枝

松は石底に生じて 旁枝ぼうし 足る

問明朝却欲歸城

明朝 却って 城市に帰らんと欲す

市我來期總不知

我わに來期らいきを問えども 総て知らず

【語釈】

○紫芝：ひじりだけ、薬草のひとつ。○山人：山に住む隠者。勾引：引き留める。○多時：しばらく。夜臥遲：（語り合って）夜寝るのが遅い。○林梢：林の梢。○碎滴：碎けた滴、しぶき。○旁枝：脇から出た枝。○却：それにもかかわらず。○來期：再来の時。

【構成】

○前聯は専ら情思いを述べ、後聯は景物を略徐し、結句に於いて情思いを述べたもの。

嶺南道中

嶺南の道中 れいなん

李徳裕 りとくゆう

嶺水争分路轉迷

嶺水争い分かれて路転た迷う りょうすい

枕榔椰葉暗蠻溪

枕榔 椰葉 蛮溪に暗し こうろう やよう ばんけい

愁衝毒霧逢蛇草

毒霧を衝いて愁いて蛇草に逢い おそ だそう

畏落沙蟲避燕泥

沙虫の落ちることを畏れて燕泥を避く さちゅう おそ えんない

五月畚田收火米

五月の畚田 火米を收む しやでん

三更津吏報潮雞

三更 津吏 潮雞を報ず しんり ちやうけい

不堪腸斷思郷處

腸断に堪えず郷を思う処 ちやうだん

紅槿花中越鳥啼

紅槿花中 越鳥啼く こうきんかちゅう えつちやうな

【語釈】

○嶺南：広東省一带。○枕榔：植物の名、タガヤサン。○椰葉：ヤシ。○蠻溪：南方の野蛮な国の溪。○毒霧：瘴気。○蛇草：毒蛇に噛まれたような有毒の草。○沙蟲：小さな毒虫の一種。○燕泥：巢作りの泥を銜えた燕。○畚田：新しく開いた田。○火米：草を焼いて作った米。陸稻。○三更：真夜中。○津吏：港を守る官吏。○潮雞：船が出帆したこと。○腸断：深い悲しみ。○紅槿花：むくげの花。○越鳥：シヤコ。

【構成】

○前聯は専ら情思いを述べ、後聯は景物を略徐し、結句に於いて情思を述べたもの。

病起

病やまいより起たつ

來らい鵬ほう

春初一臥到秋深

春初しゅんしよ 一たび臥ふして 秋の深きに到る

不見紅芳與綠陰

見みず 紅芳こうほうと綠陰りよくいんと

窗下展書難久讀

窓下そうかに書のを展のべて 久しくは読よむこと難く

池邊扶杖欲閑吟

池邊に杖たすに扶たすけられて 閑かに吟よぜんと欲す

藕穿平地生荷葉

藕はすは平地うがを穿うがちて 荷葉かようを生なじ

笋過東家作竹林

笋たけのこは東家ちくりんを過ちぎて 竹林ちくりんと作なる

在舍渾如遠鄉客

舍しやに在ありて 渾すべて 遠鄉えんきやうの客かくの如ごとく

詩僧酒伴鎮相尋

詩僧 酒を伴つねいて 鎮つねに相尋あらぬ

【語釈】

○紅芳：紅い花。 ○鎮…つねづねに。

【構成】

○前聯は専ら情思いを述べ、後聯は景物を略徐し、結句に於いて情思を述べたもの。

送李録事赴饒州

李録事が饒州に赴くを送る

皇甫冉

北人南去雪紛紛

北人南に去りて雪紛々

雁過汀洲不可聞

雁は汀洲を過ぎて聞くべかず

積水長天隨逐客

積水 長天 逐客に隨い

荒城極浦足寒雲

荒城 浦極 寒雲足る

山從建業千峰出

山は建業に從いて千峰出で

江至潯陽九派分

江は潯陽に至りて九派分かる

借問督郵纔弱冠

借問す 督郵 纔に弱冠

府中年少不如君

府中の年少 君に如かじ

【語釈】

○李録事：不祥。○饒州：江西省上饒市鄱陽県。○北人：李録事のこ
と。○紛紛：乱れ飛び散るさま。○汀洲：中洲。○積水：大江。○長
天：広大な空。○逐客：左遷された人。○極浦：遠方の浦。遙かに続
く浦。○建業：南京。○潯陽：江西省九江市。○督郵：郡吏で郡長の
部下に属する官人。○府中：政庁の所在地。

清明日與友人遊玉塘莊 清明の日友人と玉塘莊に遊ぶ

來 鵬

幾宿春山共陸郎

幾たびか春山に宿り陸郎と共にす

清明時節好風光

清明の時節好風光

細穿綠荇船頭滑

緑荇を細穿して船頭滑かに

碎踏殘花屐齒香

残花を碎踏して屐齒香し

風急嶺雲飄迥野

風急にして嶺雲迥野に飄り

雨餘山水落方塘

雨余の山水方塘に落つ

不堪吟罷東回首

堪えず吟じ罷みて東に首を回らずに

滿耳蛙聲正夕陽

耳に滿つる蛙聲正に夕陽

【語釈】

○清明：清明節。春分から数えて十五日目。○玉塘莊：不祥。○陸郎：友人を陸機（三国時代の呉から西晋にかけての政治家・文学者・武将。）になぞらえた。○風光：風景。○綠荇：緑色の浮き草。○殘花：地に落ちてゐる花。○屐齒：靴底の齒。○迥野：遠く広く広がる原野。○雨餘：雨上がり。○方塘：四角な堤。

宿淮浦寄司空曙

淮浦に宿りて司空曙に寄す

李端

愁心一倍長離憂

愁心一倍 離憂を長ず

夜思千重戀舊遊

夜思千重 旧遊を恋う

秦地故人成遠夢

秦地の故人 遠夢と成り

楚天多雨在孤舟

楚天の多雨 孤舟に在り

諸溪近海潮皆應

諸溪 海に近くして 潮 皆応じ

獨樹邊淮葉盡流

獨樹 淮に辺いて 葉 尽く流る

別恨轉深何處寫

別恨 轉た深く何れの処にか写さん

前程唯有一登樓

前程 唯だ有り 一登樓

【語釈】

○淮浦：江蘇省淮安市漣水県。○司空曙：唐代の詩人。大曆十才子の一人。○愁心：愁える心。○離憂：故郷を離れる憂い。○舊遊：昔からの友人。○秦地：長安を指す。○故人：なじみの友人。○楚天：淮浦の空。

【構成】

○前虚のところに景物を用いて情思を叙し、後実では直ちに景物を言い、結句にいたって情思を述べる。

尋郭道士不遇

郭道士かくどうしを尋ねて遇あわず

白居易はくきよい

郡中乞假來尋訪

郡中ぐんちゆうに仮を乞いて 来たりて尋訪じんぼうせしに

洞裏朝元去不逢

洞裏どうり 元に朝して 去りて逢ほうわず

看院祇留雙白鶴

院を看みれば 祇ただ留む 雙そうはくかく白鶴

入門惟見一青松

門に入れば 惟ただ見る 一いちせいしよう青松

藥爐有火丹應伏

藥炉 火有りて 丹たん応に伏すべし

雲碓無人水自春

雲碓うんたい 人無く 水 自おのずから春なり

欲問參同契中事

問わんと欲す 參同契さんどうけいちゆう中の事

未知何日得相從

未だ知らず 何れの日にか 相い從うを得ん

【語釈】

○郭道士：未詳。○郡中：郡の役所、この場合は江州。假：休暇。○洞裏：郭道士の居宅。○朝元：玄元皇帝李老君（老子）の廟に参朝する。○院：庭。○留：留守番をさせる。○丹：丹薬、仙人の不老不死の薬物。○伏：火で調伏して仙丹を練ること。○雲碓：雲母（仙薬の材料）を搗くからうす、水を受けて自動的に動く仕組みになっている。○參同契：練丹の方法を書いた本。○從容：ゆっくりと逗留すること。

【構成】

○前虚のところに景物を用いて情思を叙し、後実では直ちに景物を言い、結句にいたって情思を述べる。

早秋寄題天竺靈隱寺

早秋 てんじく 天竺・靈隱寺 りよういんじ に寄題す

賈 か 島 とう

峰前峰後寺新秋

峰前 ほうぜん 峰後 ほうご 寺 じ 新たに秋なり

絶頂高窗見沃洲

絶頂 じょうてい の高窓 こうそう に 沃洲 よくしゅう を見る

人在定中間蟋蟀

人は定中 じょうちゅう に在りて 蟋蟀 しつそつ を聞き

鶴曾棲處挂獼猴

鶴 かく 曾 そう て棲 すま みし処 ところ 獼猴 びこう を挂 か く

山鐘夜渡空江水

山鐘 さんしょう 夜 や 渡 わた る 空江 くわんが の水 みづ

汀月寒生古石樓

汀月 ていげつ 寒 さむ く生 な ず 古石樓 こせきろう

心憶懸帆身未遂

心 こころ に憶 おぼ へ 懸帆 けんぱん を 身 み 未 な だ 遂 と げず

謝公此地昔曾遊

謝公 しゃこう 此 こゝ の地 ち に 昔 むかし 曾 まづ て 遊 あそ ぶ

【語釈】

○天竺・靈隱：天竺寺と靈隱寺、共に浙江省杭州市の西郊の山中にある。寄題：他の地にあつて、題材にして詩を作ること。○沃洲：山の名、浙江省新昌県の東にある。○定中：無念無想の境地。○蟋蟀：こおろぎ。○獼猴：猿。○空江：ひっそりとした川。○汀月：岸辺の月。○懸帆：帆掛け船。○憶懸帆：帆掛け船に乗って尋ねて行きたいと思う。○謝公：晉の謝安のこと、初め勧められても出士せず、杭州付近の山中で遊び過ぎた。

【構成】

○前虚のところに景物を用いて情思を叙し、後実では直ちに景物を言い、結句にいたって情思を述べる。

題宣州開元寺水閣

宣州せんしゅうの開元寺かいげんじの水閣すいかくに題す

杜と牧ぼく

六朝文物草連空

六朝りくちょうの文物草空に連なる

天淡雲閑今古同

天淡く雲閑しずかかに今古同じ

鳥去鳥來山色裏

鳥去り鳥來たる山色うちの裏

人歌人哭水聲中

人歌い人哭す水聲うちの中

深秋簾幕千家雨

深秋れんぼく簾幕千家の雨

落日樓臺一笛風

落日樓台一笛の風

惆悵無因見范蠡

惆悵ちゆうちやうす范蠡はんれいを見るに因無し

參差煙樹五湖東

參差さんしたる煙樹五湖の東

【語釈】

○宣州：安徽省東南の宣州市。○開元寺：現安徽省宣州宣城にある寺院で、正式の名称は永樂寺。○水閣：水辺に建てたたかどの。○六朝：六つの王朝のことで、後漢の滅亡後、建業（南京）に都した六つの王朝。○文物：文化の産物。○礼法音楽学問芸術など、文化的な制度。○澹：やすらか、穏やか。○一笛風：風に乗って、一人で吹く笛の音が聞こえて来ること。○惆悵：うらみなげくさま。○無因：わけが無い。范蠡：越王勾践に仕え、呉王夫差を討って会稽の恥を雪（すす）がせ、自分の果たすべき事をした後、隱棲をするとして湖に舟を浮かべて過（ご）した。參差：長短不揃いのさま。煙樹：靄の中に霞んで見える木。五湖：太湖及びその周辺の湖。

（新釈漢文大系 詩人編 9）

【構成】

○前虚のところの景物を用いて情思を叙し、後実では直ちに景物を言い、結句にいたって情思を述べる。

長安秋夕

長安秋夕 ちやうあんしゆうせき

趙 嘏 ちやう か

雲物淒涼拂曙流

雲物 うんぶつ 淒涼として 曙 しよ を払って流れ

漢家宮闕動高秋

漢家の宮闕 きゆうけつ 高秋に動く

殘星幾點雁橫塞

殘星 ざんせい 幾點 雁 塞を横ぎり

長笛一聲人倚樓

長笛 一聲 人 樓に倚 よ る

紫豔半開籬菊靜

紫豔 しえん 半ば開いて 籬菊 りぎく 静かなり

紅衣落盡渚蓮愁

紅衣 こうい 落尽くして 渚蓮 しよれん 愁う

鱸魚正美不歸去

鱸魚 ろぎよ 正に美なれども 帰り去らず

空戴南冠學楚囚

空しく 南冠 なかば を戴きて 楚囚 そしゆう を学ぶ

【語釈】

○雲物：天地山川の氣象。○淒涼：物寂しいさま。○拂曙：暁から。
○宮闕：宮城の門。○高秋：天高き秋。○紫豔：艶やかなる紫、菊の色。○籬菊：籬の菊。○紅衣：赤い蓮の花。○鱸魚正美不歸去：晉の張翰が、故郷のスズキの膾が美なるを思つて官を辞して故郷に帰つた故事をふまえる。○南冠・楚囚：晉に捕らえられた楚の囚人が、南方の冠を着けていた故事。楚囚のごとく故郷に帰りもせず、長安に留まっているという意味。

【構成】

○前虚のところ、景物を用いて情思を叙し、後実では直ちに景物を言い、結句にいたって情思を述べる。

宿山寺

山寺に宿す

項斯こうし

栗葉重重覆翠微

栗葉りつよう 重々ちようちようとして 翠微すいびを覆いおお

黄昏溪上語人稀

黄昏けじよう 溪上 語る人稀なり

月明古寺客初到

月は 古寺に明かにして 客かく初めて到り

風度閑門僧未歸

風は 閑門かんもんに度りて 僧 未だ歸らず

山果經霜多自落

山果 霜を経て 多く 自ら落ちおのずか

水螢穿竹不停飛

水螢 竹を穿ちて 飛びて 停らずとぞま

中宵能得幾時睡

中宵ちゆうしやう 能く 幾時の 睡ねむりを得ん

又被鐘聲催著衣

又 鐘聲に 著衣うながを催さる

【語釈】

○重重：重なり合うさま。○翠微：緑色をした山の中腹。○黄昏：夕暮れ。○閑門：火との出入りの少ない門。○初：くしたばかり。○山果：山の木の実。○穿：くぐり抜ける。○中宵：真夜中。○鐘聲：この場合、夜明けを告げる鐘声。

【構成】

○前虚のところには景物を用いて情思を叙し、後実では直ちに景物を言い、結句にいたって情思を述べる。

題永城驛

永城駅に題す

薛能

秋賦春還計盡違

秋に賦して春に還り計 尽く違う

自知身是拙求知

自ら知る身は 是れ 知を求むるに拙なり

唯思曠海無休日

唯だ思う 曠海 休日無からんや

却喜孤舟似去時

却って喜ぶ 孤舟 去る時に似たるを

連浦一程兼汴宋

浦に連なる 一程 汴宋を兼ね

夾堤千柳雜唐隋

堤を夾む千柳 唐隋を雜う

從來此恨皆前達

從來 此の恨み 皆 前達あり

敢負吾君作楚辭

敢えて 吾が君に負いて楚辭を作らんや

【語釈】

○永城驛：河南省歸德府永城県。○秋賦：科挙の地方試験に合格したこと。○春還：科挙の中央試験に落第して帰ること。○拙求知：知己があれば合格したのであると言う事をいう。○曠海：広い海汴宋。論語の「道行われず、桴に乗りて海に浮かばん」を引いている。○汴宋：汴州（河南省開封市）と宋州（河南省商丘市）、永城驛と道が通じる。○唐隋：唐時代に植えられた柳と隋時代に植えられた柳。○前達：前の時代のすぐれた人。○結句：屈原の如く主君を怨んで楚辭のような詩を作らないと言う意。

【構成】

○前虚のところに景物を用いて情思を叙し、後実では直ちに景物を言い、結句にいたって情思を述べる。

慈恩偶題

慈恩じおんに偶たまたま題だいす

鄭てい谷こく

往事悠悠成浩歎

往事 悠々として浩歎こうたんを成す

浮生擾擾竟何能

浮生 擾々として竟つひに何をか能くせん

故山歲晚不歸去

故山 歲晚くれて歸り去らず

高塔晴來獨自登

高塔 晴來たりて ひとりひとりみずか自ら登る

林下聽經秋苑鹿

林下 經けいを聴く 秋苑しゅうえんの鹿

江邊掃葉夕陽僧

江邊 葉はらを掃う夕陽の僧

吟餘却起雙峰念

吟餘ぎんよ 却かつて起る 双峰の念

曾看菴西瀑布冰

曾かつて看る 菴西あんせい 瀑布の氷

【語釈】

○慈恩：慈恩寺。長安にある玄奘三蔵ゆかりの名刹。○往事：過ぎ去った昔。○悠悠：のんびり、ゆったりしたさま。○浩歎：大きなため息。○浮生：はかない浮き世。○擾擾：ごたごたしているさま。○竟何能：反語、なにもできない。○故山：故郷の山、故郷。○高塔：慈恩寺の大雁塔。○獨自：独り。二字でこう読む場合もある。○雙峯：広東省曲江県の雙峯寺。○菴西瀑布：雙峯寺の西にある滝。

【構成】

○前虚のところに景物を用いて情思を叙し、後実では直ちに景物を言い、結句にいたって情思を述べる。

都城蕭員外寄海棠花

都城の蕭員外しやういんがい海棠花かいどうかを寄せらる

羊士諤ようしがく

珠履行臺擁附蟬

珠履しゆりの行台こうだい附蟬ふせんを擁ようす

外郎高歩似神仙

外郎がいろう高歩こうしして神仙しんしに似たり

陳詞今見唐風盛

陳詞ちんし今いまに見る唐風たうふうの盛さかなるを

從事遙瞻魏國賢

從事じゆうじ遙あおかに瞻あおぐ魏國ゑいこくの賢けん

擲地好辭凌綵筆

擲地てきちの好辭こうじ綵筆さいひつを凌しのぎ

浣花春水膩魚箋

浣花わんかの春水しゆんすい魚箋ぎょせんに膩なく

東山芳意須同賞

東山とうざんの芳意ほうい須すべからく同ともに賞あづかすべし

子著囊盛幾日傳

子しを著つけ囊のうに盛もつて幾日いくにちか伝つたえん

【語釈】

○蕭員外：不祥。○珠履：珠の履。楚の春申君の故事をもって、蕭員外に喩える。○行臺：官職の名、臨時に外部において尚書のことを行う者、蕭員外を指す。○附蟬：冠の飾り。貴い官を指す。○外郎高歩：多数の随員を従えて歩くさま。○陳詞：詩賦を表した物、蕭員外から寄せられた「海棠花」詩。○從事：随行する役人。○魏國賢：曹植に従う王粲・陳琳などの賢者。蕭員外をこれらに喩えている。○擲地：擲地金聲（故事）。○好辭：良い詩。絶妙好辭（故事）。○凌綵筆：故事。○浣花：成都の浣花溪。○魚箋：浣花溪産の紙。○東山：会稽（浙江省紹興市）、謝安が妓女を携えて遊んだ。○芳意：春意、他人の情意の美称。○子著囊盛：実を袋に入れる意。王羲之の故事。

【構成】

○前虚に故事を用いたもの。

陳琳墓

陳琳の墓 ちんりん

溫庭筠 おんていじん

曾於青史見遺文

曾かつて 青史せいしに於いて 遺文を見る

今日飄零過古墳

今日 飄零ひょうれいして 古墳を過ぐ

詞客有靈應識我

詞客しかく 靈れい 有らば 応まさに我を識るべし

霸才無主始憐君

霸才はさい 主無くして 始めて君を憐れむ

石麟埋沒藏春草

石麟せきりん 埋沒して 春草かくに蔵れ

銅雀荒涼起暮雲

銅雀 荒涼として 暮雲ぼうん起こる

莫怪臨風倍惆悵

怪しむ莫かれ 風に臨みて 倍ますます 惆悵ちゆうちやうするを

欲將書劍學從軍

書劍を將もつて 從軍を學ばんと欲す

【語釈】

○陳琳：曹操に仕え、多くの檄文を書いた名作家。墓は下邳（江蘇省徐州市に位置する県級市）にある。○青史：歴史を標した書物。○飄零：落ちぶれる。○霸才：覇者を助ける才能。○石麟：石で作った麒麟、塚に置く。○銅雀：銅雀臺、曹操が作った宮殿。○惆悵：嘆き悲しむ。

【構成】

○前虚に故事を用いたもの。

鸚鵡洲眺望

鸚鵡洲の眺望

崔塗

悵望春襟鬱未開

悵望すれば 春襟鬱として未だ開かず

重臨鸚鵡益堪哀

重ねて 鸚鵡に臨んで 益ます哀れむに堪えたり

曹瞞尚不能容物

曹瞞も 尚お物を容れる能わず

黃祖何曾解愛才

黃祖何ぞ曾て解く才を愛せん

幽島暖聞燕鴈去

幽島暖くして 燕鴈の去るを聞き

曉江晴覺蜀波來

曉江晴れて 蜀波の來たるを覺ゆ

唯人正得風濤便

唯人か 正に風濤の便を得て

一點征帆萬里迴

一點の征帆 万里より迴える

【語釈】

○鸚鵡洲：湖北省武漢市西南の長江にあった中洲。三国時代に呉の黃祖が禰衡を殺して埋めた所。○悵望：悲しく眺めやる。○春襟：春の日の思い。○鸚鵡：鸚鵡洲。○曹瞞：禰衡が仕えようとしたが、江夏へ放逐した人物。○黃祖：江夏の太守。○幽島：人気の無いひっそりした島、鸚鵡洲。燕鴈：燕の地方の鴈。○曉江：ここでは浙江。○蜀波：蜀の水が溶けて水になった物。○風濤便：風は追い風、波は穏やかなこと。○征帆：旅用の船。

【構成】

○前虚に故事を用いたもの。

繡嶺宮

繡嶺宮 しゅうれいきゅう

崔塗 さいと

古殿春殘綠野陰

古殿 春は残ざんして 緑野かげの陰

上皇曾此去泥金

上皇 曾すつて 此こゝに 泥金でいきんを去すつ

三城帳屬升平夢

三城の帳ぞくは屬しようへいす 升平の夢

一曲鈴關悵望心

一曲の鈴れいは關くわんわる 悵望ちやうぼうの心

苑路暗迷香輦絕

苑路えんろ 暗あんに迷まよいて 香輦かうれん 絶たえ

繚垣秋斷草煙深

繚垣りやうえん 秋あきに断たえて 草煙そうえん 深ふかし

前朝舊物東流在

前朝の旧物 東流 在あり

猶爲年年下翠岑

猶なお 為なに 年々 翠岑すいしんより下くだる

【語釈】

○繡嶺宮：唐の高宗が造った宮殿。河南省陝県にある。○上皇：玄宗。
○去泥金：封禅の儀を行う為に惜しみなく黄金を浪費したこと。○
三城帳：尚書が行幸に供奉して三部の帳を廻ら城の様に見えたこと。
○升平夢：天下太平のときの夢。○升平夢：玄宗が楊貴妃を偲んで
作った「雨霖鈴曲」のこと。○悵望：悲しく遠くを眺めやる。○苑路
：花園の中の道。○香輦：帝王や妃の乗る輦。○繚垣：周囲の垣根。
○草煙：草と霞。○翠岑：緑の峰。

【構成】

○前虚に故事を用いたもの。

前実後虚

春日道中寄孟侍御

春日道中孟侍御に寄す

張南史

春來游子傷歸路

春來 游子 歸路を傷む

時有白雲邀獨行

時に白雲の 獨行を邀うる有り

水流亂赴石潭響

水流は乱れ赴いて 石潭 響き

花發不知山樹名

花は発いて知らず 山樹の名

誰家魚網求鮮食

誰が家の魚網か 鮮食を求め

何處人煙事火耕

何處の人煙か 火耕を事とす

昨日已嘗村酒熟

昨日已に嘗む 村酒の熟すを

一杯思與孟嘉傾

一杯 孟嘉と 傾けんことを思う

【語釈】

○孟侍御：不詳、侍御は官名で御持史のこと。○春來：春になると、「來」は助辞。○游子：さすらい人。○獨行：一人旅。○石潭：岩の多い淵。○火耕：焼き畑農業。○孟嘉：晋の人、酒好きで有名、ここでは、孟侍御をなぞらえたもの。

【構成】

○前実の語は軽く、後虚の情は深い。

早春歸整屋舊居寄耿漳李端

早春 整屋ちゆうちつの旧居きうきに帰りて耿漳こうい・

李端りたんに寄す

盧ろ綸りん

野日初晴麥壠分

野日 初めて晴れ 麥壠ばくろう 分かる

竹園村巷鹿成羣

竹園ちくえん 村巷そんこう 鹿群れを成す

萬家廢井生新草

万家の廢井はいせい 新草を生じ

一樹繁花對古墳

一樹はんかの繁花 古墳に對す

引水忽驚冰滿澗

水を引いて 忽ち驚く 氷かんの澗かんに滿つるを

向田空見石和雲

田に向いて 空しく見る 石の雲に和するを

可憐荒歲青山下

憐れんわれむべし 荒歲こうさい 青山の下

惟有松枝好寄君

惟だ 松枝しょうしのみ有りて 君に寄するに好し

【語釈】

○整屋：陝西省鵬翔県。○耿漳：唐の詩人。字は洪源。蒲州河東県の出身。七六三年の進士。大理司から左拾遺に至った。大曆十才子の一人。○李端：唐の詩人。進士に及第、杭州司馬に任ぜられたが、ついに衡山に移住し、衡岳幽人と称して隱者の生活を送った。大曆十才子の一人。○麥壠：麦馬畑。○村巷：村の道。○澗：溪。○荒歲：穀物の実らない年。

【構成】

○前実の語は軽く、後虚の情は深い。

松滋渡望峽中

松滋渡しようじとより峽中きようちゆうを望む

劉禹錫りゆううしやく

渡頭輕雨洒寒梅

渡頭の輕雨寒梅に洒そそぐ

雲際溶溶雪水來

雲際溶々として雪水來たる

夢渚草長迷楚望

夢渚草長じて楚望を迷わし

夷陵土黒有秦灰

夷陵土黒くして秦灰有り

巴人淚應猿聲落

巴人の淚は猿声に應じて落ち

蜀客船從鳥道回

蜀客の船は鳥道よ從り回かえる

十二碧峰何處所

十二の碧峰へきほう何處いずれの所ぞ

永安宮外是荒臺

永安宮外えいあんきゆうがい是れ荒臺

【語釈】

○松滋渡：江陵にある渡し。○渡頭：渡し場のあたり。○溶溶：水が盛んに流れるさま。○夢渚：洞庭湖の周辺に広がる沼沢地。○楚望：楚の国の遠望。○夷陵：湖北省宜昌。○秦灰：秦の將軍白起が焼き払ったあと灰。○巴人：四川省東部の人。○鳥道：鳥しか通わないような険阻な道（川）。○十二碧峰：巫山にある十二の緑の峰。○永安宮：夔州にあった行宮、劉備が死んだところ。

【構成】

○前実の語は軽く、後虚の情は深い。

春日閑坐

春日閑坐 しゅんじつかんざ

劉禹錫 りゅううしやく

官曹崇重難頻入

官曹 かんそう 崇重 すうちよう にして頻 しき りに入ること難 かた く

第宅清閑且獨行

第宅 だいたく 清閑 せいげん にして且 しばら く独り行かん

階蟻相逢如偶語

階蟻 かいぎ 相逢 さうぶつ いて 偶語 ぐうご するが如く

園蜂速去恐違程

園蜂 えんぷ 速く去りて 程 たが に違 ちが うことを恐る

人於紅藥偏憐色

人は 紅藥 こうやく に於いて 偏 ひとえ えに色を憐れみ

鶯到垂楊不惜聲

鶯は 垂楊 すいよう に到りて 声を惜 おぼ しまさず

東洛池臺怨拋擲

東洛の池台 拋擲 ほうてき を怨む

移文非久會應成

移文 久しきに非 あ らず 會 かなら はず 応 まさ に成るべし

【語釈】

○官曹：役人。○崇重：威嚴を示すこと。○第宅：自分の家。○階蟻：階下に往来する蟻。○偶語：對話。○園蜂：蜂。○違程：時刻に遅れる。○紅藥：紅色の芍薬。○東洛：洛陽。○池臺：池に臨んだうてな。○拋擲：留守にしておくこと。○移文：「北山移文」、隠棲していた周彦倫が官に仕えようとしたところ、孔稚圭がこれを譏った文書。

【構成】

○前実の語は軽く、後虚の情は深い。

晏安寺

晏安寺 あんあんじ

李 り
紳 しん

寺深松桂無塵事

寺に松桂深くして塵事無し じんじ

地接荒郊帶夕陽

地は荒郊に接し夕陽を帯ぶ せきよう

啼鳥歇時山寂寂

啼鳥歇む時山寂々 せきせき

野花殘處月蒼蒼

野花残する処月蒼々 そうそう

碧紗凝艶開金像

碧紗艶を凝らして金像開き きんぞう

清梵銷聲閉竹房

清梵声銷んで竹房閉ず ちくぼう

丘壠漸平連茂草

丘壠漸く平かにして茂草連なる もそう

九原何處不心傷

九原何れの処か心傷まざらん きゅうげん

【語釈】

○晏安寺…山西省絳州にある寺。○荒郊…荒野。○寂寂…寂しく静かなさま。○蒼蒼…月の青白い色の形容。○碧紗…緑色のうすぎぬのカーテン。○金像…金銅の仏像。○清梵…読経の声。○丘壠…荒れ地。○九原…墓のある野原。

【構成】

○前実の話は軽く、後虚の情は深い。

館娃宮

かんあきゆう
館娃宮

ひじつきゆう
皮日休

艶骨已成蘭麝土

えんこつ 已に蘭麝の土と成り

宮牆依舊壓層崖

きゆうしよう 宮牆 旧に依りて 層崖を圧す

弩臺雨壞逢金鏃

どだい 弩台 雨に壞れて 金鏃に逢い

香徑泥銷露玉釵

かうけい 香徑 泥に銷して 玉釵を露す

硯沼只留山鳥浴

けんしょう 硯沼 只だ 山鳥の浴するを留め

屨廊空信野花埋

しょうろう 屨廊 空しく信す 野花の埋むるに

姑蘇麋鹿真閑事

こそ 姑蘇の麋鹿 真に閑事

須爲當時一愴懷

すべから 須く当時の為に一たび懷を愴ましむべし

【語釈】

○館娃宮…呉王夫差が西施を住まわせた宮殿、江蘇省蘇州の硯石山にある。○艶骨…西施の骨。○蘭麝…名貴な香料。○宮牆…宮殿の垣根。○層崖…重なった崖。○弩臺…夫差が美女たちに弓弩を慣わせた台。○玉釵…玉のかんざし。○硯沼…硯石山にある硯池。○屨廊…響廊…呉の宮殿の廊下。歩くと特殊な音がした。○姑蘇…姑蘇台。呉王夫差が姑蘇山（江蘇省呉県の西南）上に築いた台の名。○麋鹿…鹿。

【構成】

○前実の語は軽く、後虚の情は深い。

方干隱居

ほうかん
方干の隱居

りざんぼ
李山甫

咬咬嘎嘎水禽聲

こうこう かつかつ すいきん
咬々 嘎々 水禽の聲

露洗松陰滿院清

しゅういん
露は松陰を洗って 滿院清し

溪畔印沙多鶴跡

かくせき
溪畔 沙に印して 鶴跡多く

檻前題竹有僧名

かんぜん
檻前 竹に題して 僧名有り

問人遠岫千重意

えんしゅう
人に問う 遠岫 千重の意

對客閑雲一片情

かんうん
客に對す 閑雲 一片の情

早晚塵埃得休去

しゅう
早晚 塵埃 休して去るを得て

且將書劍事先生

しゅうけん
且く 書劍を將つて 先生に事えん

【語釈】

○方幹：大中（八四七〜八四九）科挙を受けたが合格せず、浙江省紹興の鑑湖に隱棲した。○咬咬嘎嘎：水鳥の鳴き声を表す擬声語。○滿院：庭一杯。○溪畔：谿のほとり。○印沙：砂に印がついている。○鶴跡：鶴の足跡。○檻：家の周囲の垣根の手すり。○遠岫：遠い山の峰。○千重：幾つもの山が重なっている。○閑雲：のどかに漂う雲。○塵埃：俗世間の塵、汚れた俗事。○先生：方干のこと。

【構成】

○前実の語は軽く、後虚の情は深い。

誄李端病中見寄

李端が病中に寄せらるるに誄ゆ

盧綸

野寺昏鐘山正陰

野寺の昏鐘 山正に陰く

亂藤高竹水聲深

乱藤 高竹 水声深し

田夫就餉還依草

田夫 餉に就いて 還お 草に依り

野雉驚飛不過林

野雉 驚飛して 林を過ぎず

齋沬暫思同靜室

齋沬 暫く思う 靜室を同じくせんことを

清羸已覺助禪心

清羸 已に覺ゆ 禪心を助くるを

寂寞日長誰問疾

寂寞 日長くして 誰か疾を問わん

料君惟取古方尋

料る 君が惟だ古方を取りて 尋ねんことを

【語釈】

○李端：唐の詩人。進士に及第、杭州司馬に任ぜられたが、ついに衡山に移住し、衡岳幽人と称して隱者の生活を送った。大曆十才子の一人。○野寺：野原の中にある寺。李端が病を得て、この寺で身を養っていた。○昏鐘：晚鐘。○餉：弁当。○齋沬：齋戒沐浴、身を清淨にすること。○靜室：李端がいると同じような閑かな部屋。○清羸：清く瘦せていること。李端のこと。○寂寞：ひっそりとしたものさびしいさま。○古方：昔の医方。

贈道士

道士に贈る

楮載ちよさい

簪星曳月下蓬壺

星を簪かざし 月を曳ひいて 蓬壺ほうこを下る

曾見東臯種白榆

曾とて見る 東臯とうこうに 白榆はくゆを種うえしを

六甲威靈藏瑞檢

六甲ろくがの威靈いれい 瑞檢ずいけんに藏おさめ

五龍雷電遶霜都

五龍ごりゅうの雷電らいでん 霜都そうとを遶めぐる

惟教鶴探丹丘信

惟ただ鶴かくをして 探さぐらしむ 丹丘たんきゅうの信しんを

不使人窺太乙爐

人ひとをして 窺うかがわしめず 太乙たいおつの爐ろ

聞説葛陂風浪惡

聞説きくならく 葛陂かっひ 風浪ふうら 惡あくしと

許騎青鹿從行無

青鹿せいりくに騎こして 行こうに従したがうことを 許ゆるすや無なや

【語釈】

○簪星曳月：星冠月佩、道士の身の裝飾品。○蓬壺：蓬萊（仙人が住む山）。○東臯：東方。○白榆：白榆星、星の名。○六甲：甲子から甲戌までの六つの甲。○瑞檢：玉の箱。○五龍：五方の星。○霜都：清い壇。○丹丘：仙人の住むところ。○太乙爐：仙薬である太乙丹を練る炉。○葛陂：河南省新祭県の南の地名。○青鹿：蘇耽が騎ったという青い鹿。

送客之湖南

客の湖南こなんに之くを送る

白居易はくきよい

年年漸見南方物

年々漸ようやく見る南方の物

事事堪傷北客情

事々傷ましむに堪えたり北客の情

山鬼趨跳唯一足

山鬼趨きようちよう跳す唯ただ一足

峽猿哀怨過三聲

峽猿哀怨あいえんして三声を過ぐ

帆開青草湖中去

帆は開いて青草湖せいそうこちゆう中ちゆうに去り

衣濕黃梅雨裏行

衣は湿うるおいて黃梅雨こうばいうり裏りに行く

別後雙魚定難覓

別後双魚は定めて覓め難からん

近來潮不到湓城

近來潮は湓城ほんじように到らず

【語釈】

- 湖南：潭州（湖南省長沙市一帯）。○漸：だんだんと、次第次第に。
- 北客：北から来た人。この客と作者。○山鬼：山中の一本足の怪物。
- 跳唯：飛び跳ねる。○峽猿：山峽に住む猿。○哀怨：悲しみ怨む。
- 青草湖：洞庭湖の南にある湖。○黃梅雨：梅雨。○雙魚：双の鯉。
- 手紙、書簡をいう。『文選』古樂府「飲馬長城堀行」。○湓城：江西省九江市。

『新釈漢文大系 白氏文集（三）』

送劉谷

劉谷を送る

李郢

村橋西路雪初晴

村橋そんきょうの西路雪初めて晴る

雲暖沙乾馬足輕

雲暖かに沙乾わき馬足輕ろし

寒澗渡頭芳草色

寒澗かんかん渡頭ととう芳草の色

新梅嶺外鷓鴣聲

新梅嶺外しやこ鷓鴣の聲

郵亭已送征車發

郵亭ゆうてい已に征車せいしゃの發するを送る

山館誰將候火迎

山館誰か候火を將もって迎えん

落日千峰轉迢遰

落日千峰ちようてい轉た迢遰たり

知君回首望高城

知る君が首こくべを回して高城を望むを

【語釈】

○劉谷…不祥。○寒澗…さむざむとした谷川。○渡頭…渡し場。○芳草…かおりぐさ。○郵亭…駅亭。○征車…旅行く車。○候火…たいまつ。○轉…まします。○迢遰…遙かなさま。

江上逢王將軍

江上にて王將軍に逢う

李郢

虬鬚憔悴羽林郎

きゅうびんしょうすい うりんろう
虬鬚憔悴す羽林郎

曾入甘泉侍武皇

かつ
曾て甘泉に入り武皇に侍す

鵬沒夜雲知御苑

わし
鵬は夜雲に没して 御苑を知り

馬隨仙仗識天香

せんじょう てんこう
馬は仙仗に隨いて 天香を識る

五湖歸去孤舟月

五湖 歸り去る 孤舟の月

六國平來兩鬢霜

六国 平らげ来る兩鬢の霜

唯有桓伊江上笛

かんい
唯だ 桓伊の 江上の笛のみ有りて

臥吹三弄送殘陽

さんろう
臥して三弄を吹き 殘陽を送る

【語釈】

○王將軍：不祥。○虬鬚：みづちのように曲がっている鬚。○憔悴：老いて衰える。○羽林郎：羽林軍（近衛兵）の仕官。王將軍の元の役職。○甘泉：甘泉宮、陝西省淳化県にある。○武皇：玄宗をいう。○鵬：大鷲。○仙仗：儀仗兵。○天香：朝廷で儀式の時に焚く香。○五湖：范蠡が隠棲したときに渡った湖。○六國：戦国七国の内、秦に征服された六国。○桓伊：晉の征南將軍、引退いたとき、財物は、王徽之から贈られた笛一つだけを持った。○三弄：梅花三弄曲。

和皮日休酬茅山廣文 皮日休ひじつきゅうの茅山の広文に酬ゆに和す 陸龜蒙りくきもん

一片輕帆背夕陽

一片けいはんの輕帆 夕陽せきように背き

望三峯拜七真堂

三峯を望みて七真堂しちしんどうを拝す

天寒夜漱雲牙淨

天寒くして夜うんが雲牙きよの淨きに漱くちすすぎ

雪壞晴梳石髮香

雪は壞れて晴せきはつに石髮かんばしの香しきに梳くしけずる

自拂烟霞安筆格

自ら煙霞を払いて筆格を安んじ

獨開封檢試砂牀

独り封檢を開いて砂牀を試む

莫言洞府能招隱

言う莫かれ洞府どうふ能く隱を招くと

會輾颯輪見玉皇

會かならず 颯輪ひょうりんを輾きしらせて 玉皇を見ん

【語釈】

○皮日休：襄陽の人、八六七年の進士に及第し、著作郎・太常博士などを歴任した。陸龜蒙と合わせて皮陸と呼ぶことがある。○茅山廣文：不祥。○輕帆：軽やかな小さな帆船。○三峯：潤州（江蘇省鎮江市）にある三つの峯。○七真堂：道教の七真人を祀る堂。○雲牙：茶のこと。○石髮：苔のこと。○煙霞：靄と霞。○筆格：筆かけ。○封檢：大切な箱。○砂牀：道士が薬を練る方法の一つ。○洞府：道教の神仙の住む地方。○颯輪：仙人の乗る車。○玉皇：道教の本尊。

【構成】

○首聯・頷聯：皮日休を言う。頸聯は広文を言う。尾聯は両者を言う。

蒲津河亭

ほしん 蒲津の河亭
かてい

とうきよげん 唐彦謙

宿雨清秋霽景澄

宿雨 清秋 霽景澄み
せいけい

廣亭高樹更晨興

広亭 高樹 更に晨に興く
あした お

煙横博望乘槎水

煙は横う 博望が 槎に乗ぜし水
よこた はくぼう さ じょう

日上文王避雨陵

日は上る 文王が 雨を避けし陵
りょう

孤棹夷猶期獨往

孤棹 夷猶して 独往を期し
ことう いゆう ひとり

曲欄愁絶每長凭

曲欄 愁絶して毎に 長に凭る
まごしえ よ

思郷懷古多傷別

郷を思い 古を懐い 多く別れを傷む
いにしえ

此際哀吟幾不勝

此の際 哀吟して幾ど勝えず
ほとん た

【語釈】

○蒲津：山西省蒲州府永濟県。○河亭：川辺の宿場町。○宿雨：夜来の雨。○霽景：雨後の晴れた景色。○煙：靄、霞。○博望乘槎：博望は張騫のこと、槎に乗って銀河に到達したという傳説（蒙求）。望乗槎水は黄河のこと。○文王避雨陵：周の文王が雨を避けたという二つの陵、河南省陝県の穀山にある。○孤棹：孤舟。○夷猶：ぐずぐずする。○曲欄：曲がった欄干。○愁絶：ひどく愁い悲しむ。

感懷

感懷 かんかい

劉長卿 りゅうちやうけい

秋風落葉正堪悲

秋風落葉 正まさに悲しむに堪えたり

黃菊殘花欲待誰

黃菊の殘花 誰を待たんと欲す

水近偏逢寒氣早

水近くして 偏ひとえに逢う 寒氣の早きに

山深長見日光遲

山深くして 長ながく見る 日光の遲きを

愁中卜命看周易

愁しゅう中に 命めいを卜して 周易しゅうえきを看み

夢裏招魂誦楚詞

夢裏に魂を招きて 楚詞そしを誦しやうす

自笑不如湘浦鴈

自ら笑う 湘浦しやうほの鴈かりに如しからざるを

飛來却是北歸時

飛來たるは 却かって 是れ 北に帰る時

【語釈】

○感懷：心に感じた思い。○殘花：損なわれた花。○水：川や湖。偏：ひとえに、すこぶる。○愁中：愁いの中で、愁いを抱いて。○卜命：運命をうらなう。○周易：周代の占いを書いた書、『易経』。○夢裏：夢のなか。○招魂：死者のたましいを招いてなぐさめ、祭る。○楚詞：『楚辞』。○自笑：自嘲する。不如A：Aにおよばない。○湘浦：湘水のほとり。○湘水は：湖南省を流れて瀟水と合流して洞庭湖に注ぐ川。

【構成】

○尾聯において、別に新意を設けて、前六句を結んだもの。

輞川積雨

輞川もうせんの積雨

王おう維い

積雨空林煙火遲

積雨せきう 空林 煙火遲し

蒸藜炊黍餉東菑

藜を蒸し 黍を炊きて 東菑に餉す

漠漠水田飛白鷺

漠々たる水田に 白鷺 飛び

陰陰夏木轉黃鸝

陰々たる夏木に 黃鸝 轉ずる

山中習靜觀朝槿

山中の習靜 朝槿を觀じ

松下清齋折露葵

松下の清齋 露葵を折る

野老與人爭席罷

野老 人と席を争うを罷むに

海鷗何事更相疑

海鷗 何事か 更に相疑う

【語釈】

○積雨：長雨。○空林：人氣の無い林。○煙火：かまどの煙。○藜：はまびし。○黍：きび。○東菑：東の畑（で働いている人）。○餉：弁当として送る。○漠漠：広々として果てしないさま。○白鷺：しらすぎ。○陰陰：木が茂って暗いさま。○黃鸝：ちようせんうぐいす。○轉：さえずる。○習靜：心を落ち着けて坐り、精神統一を行う。○觀朝槿：朝槿は木蓮。世の無常さについて達觀すること。○清齋：精進料理。○露葵：フユアオイ。羹にする。○野老：田舎の老人、王維の自称。○海鷗：『列子』「黄帝篇」の寓話。

（新釈漢文大系 詩人編 3）

【構成】

○尾聯において、別に新意を設けて、前六句を結んだもの。

石門暮春

せきもん ぼしゆん
石門の暮春

せん き
銭起

自哂鄙夫多野性

みずか わら ひふ
自ら哂う 鄙夫の 野性多きを

貧居數畝半臨湍

ひんきよ すうほ なか たん
貧居 數畝 半ば湍に臨む

谿雲雜雨來茅屋

けいうん こくう
谿雲 雜雨 茅屋に來たる

山雀將雛傍藥欄

さんじゃく ひな やくらん
山雀 雛を將いて 藥欄に傍う

仙籙滿牀閑不厭

せんろく
仙籙 牀に満ちて 閑にして厭かず

陰符在篋老羞看

いんぷ
陰符 篋に在りて 老いて 看るを羞ず

更憐童子宜春服

更に憐われむ 童子の 春服に宜しきを

花裏尋師到杏壇

かり
花裏 師を尋ねて 杏壇に到る

【語釈】

○石門：山東省臨邑県にあると思われるが、不詳。○鄙夫：おろかで卑しい人。○野性：性情の野暮なこと、世間の慣習や礼儀作法になじまないこと。○湍：早瀬。○谿雲：谿からわき上がる雲。○藥欄：菓草畑の作の柵。○仙籙：仙道の書。○陰符：陰符経、のことで転じて兵法の書を言う。○杏壇：師の教壇。

【構成】

○尾聯において、別に新意を設けて、前六句を結んだもの。

酬慈恩寺文郁上人

慈恩寺の文郁上人に酬ゆ

賈島

袈裟影入禁池清

袈裟の影は禁池に入りて清し

猶憶郷山近赤城

猶お憶う郷山の赤城に近きを

籬落罅間寒蟹過

籬落の罅間に寒蟹過ぎ

莓苔石上晚蛩行

莓苔の石上に晩蛩行く

期登野閣閑應甚

野閣に登らんと期して閑応に甚しかるべく

阻宿幽房疾未平

幽房に阻宿して疾未だ平かならず

聞説又尋南岳去

聞説く又南岳を尋ね去ると

無端詩思忽然生

端無くも詩思忽然として生ず

【語釈】

○慈恩寺：長安の南東、曲江の当たりにある寺、玄奘三蔵が経を翻訳した寺。○文郁上人：不詳。○酬：詩を寄せられそれに応える。○禁池：禁中の池。○郷山：故郷の山。○赤城：天台山の目印である赤城峰。○籬落：まがき、かきね。○罅間：すきま。○寒蟹：寒々とした蟹。○莓苔：こけ。○晩蛩：晩になくコオロギ。○野閣：郊外の高殿。○幽房：静かで奥深い部屋。○疾未平：いまだ病が治らない。○聞説：聞くとところによれば。○南岳：南方の山。○無端：思いがけず。○詩思：詩を作ろうと思う心。

【構成】

○尾聯において、別に新意を設けて、前六句を結んだもの。

江亭秋霽

江亭の秋霽

李^り
郢^{えい}

碧天涼冷雁來疎

碧天^{へきてん} 涼冷^{りようれい}にして 雁^{かり} 來ること 疎^{まばら}なり

閑看江雲思有餘

閑^{しずか}に 江雲^{しゅうかん}を 看^{ちてい}て 思^{かよう}い 余^{あま}り有^あり

秋館池亭荷葉後

秋館^{しゅうかん}の 池亭^{ちてい} 荷葉^{かよう}の 後

野人籬落豆花初

野人^{のり}の 籬落^{ららく} 豆花^{まめはな}の 初^{はじめ}

無愁自得仙翁術

愁^{おのずか}無^なくして 自^{おのずか}ら 得^えたり 仙翁^{せんおう}の 術

多病能忘太史書

病^{やま}多^{おほ}くして 能^よく 太史^{たishi}の 書^{しよ}を 忘^{わす}る

聞説故園香稻熟

聞説^{きくなら}く 故園^{こゝろ} 香稻^{かうとう} 熟^{じやく}すと

片帆歸去就鱸魚

片帆^{へんぱん} 歸^{かへ}り去^りりて 鱸魚^{ろぎよ}に 就^つかん

【語釈】

○江亭：川辺の亭。○秋霽：秋の晴れた空。○雁來疎：郷信の稀なことを言う。○江雲：江上の雲。○池亭：池のある亭。○野人：村人。○野人：○籬落：まがき、かきね。○仙翁術：練丹の秘術。○太史書：『史記』。○香稻：稻の一種。○片帆：小さな帆掛け船。○鱸魚：スズキの一種。その膾を食べたいために官職を捨てて故郷に帰った張翰の故事。

【構成】

○尾聯において、別に新意を設けて、前六句を結んだもの。

漢南春望

漢南の春望

薛能

獨尋春色上高臺

ひとり 春色を尋ねて 高台に上る

三月皇州駕未回

三月の皇州 駕未だ回えらず

幾處松筠燒後死

幾處の松筠ぞ 燒後に死し

誰家桃李亂中開

誰が家の桃李か 乱中に開く

奸邪用法元非法

奸邪法を用う 元法に非ず

唱和求才不是才

唱和して 才を求む 是れ 才ならず

自古浮雲蔽白日

古え自り 浮雲 白日を蔽う

洗天風雨幾時來

天を洗う風雨 幾時か来たらん

【語釈】

○漢南：漢水の南、湖北省江陵のあたり。○皇州：都、長安。○駕：天子の車駕。○松筠：松と竹。○乱中：黄巢の乱。○姦邪：邪悪な人間。○浮雲：奸臣。○白日：天子。○洗天風雨：周の武王が殷の紂王を撃つときに雨が降り、太公望が「洗兵雨」と言った。

【構成】

○尾聯において、別に新意を設けて、前六句を結んだもの。

春夕旅懷

しゅんせき りよかい
春夕の旅懷

さいと
崔塗

水流花謝兩無情

水は流れ 花は謝し 両つながら無情

送盡東風過楚城

東風を送り尽くして楚城を過ぐ

胡蝶夢中家萬里

胡蝶夢中に 家万里

杜鵑枝上月三更

杜鵑枝上に 月三更

故園書動經年到

故園の書は 動やもすれば 年を経て到り

華髮春惟兩鬢生

華か髮の春は 惟ただ 兩鬢りようびんに生ず

自是不歸歸便得

自らはれ歸らず 歸らば便すなわち得ん

五湖煙景有誰爭

五湖の煙景 誰り有てか争わん

【語釈】

○楚城：不詳、洞庭湖付近にある街。○胡蝶夢：『莊子』による。○

杜鵑：ホトトギス。○華髮：白髮。○五湖：范蠡が越を去った太湖。

○煙景：靄のかかった景色。

【構成】

○尾聯において、別に新意を設けて、前六句を結んだもの。

長陵

長陵

唐彦謙
とうげんけん

長安高闕此安劉

長安の高闕 此に 劉を安んず

附葬纍纍盡列侯

附葬 纍々として 尽く 列侯

豐上舊居無故里

豐上の旧居 故里無く

沛中原廟對荒丘

沛中の原廟 荒丘に対す

耳聞英主提三尺

耳に聞く 英主 三尺を 提しと

眼見愚民盜一杯

眼に見る 愚民 一杯を盗むを

千載豎儒騎瘦馬

千載の豎儒 瘦馬に騎し

渭城斜日重回頭

渭城の斜日 重ねて 頭を回らす

【語釈】

○漢の高祖の陵、長安の北にある。○高闕：広大な宮の門。○附葬：回りに葬られている人の墳墓。○纍纍：続き連なっているさま。○豐上：沛（江蘇省徐州府豊県）、高祖の故郷で、高祖が此の地の民を陝西省西安府臨潼県（新豊）に移した。○沛中原廟：沛にあった高祖の元の廟。○英主：高祖のこと、三尺の劍を引つ提げて天下を取った。○盜一杯：長陵の土一杯を盗む。○千載：千年後。○豎儒：つまらない儒者、作者のこと。○渭城：咸陽、秦の都のあったところ。

【構成】

○尾聯において、別に新意を設けて、前六句を結んだもの。

咸陽懷古

咸陽懷古 かんようかいこ

韋莊 お せう

城邊人倚夕陽樓

城辺 人は倚る 夕陽の楼 よ せきよう

城上雲凝萬古愁

城上 雲は凝る 万古の愁 こ

山色不知秦苑廢

山色は知らず 秦苑の廢するを しんえん

水聲空傍漢宮流

水は空しく 漢宮に傍いて流る そ

李斯不向倉中悟

李斯 倉中に向いて悟らずんば りし そうちゆう お さと

徐福應無物外遊

徐福 応に物外に遊ぶこと無かるべし まさ

莫怪楚吟偏斷骨

怪しむ莫かれ楚吟して偏えに骨を断つを そぎん ひと

野煙蹤跡似東周

野煙 蹤跡 東周に似たり じゆうせき

【語釈】

○咸陽：陝西省咸陽市、秦の都のあったところ。○山色：山の景色。

○秦苑：秦の御苑。○李斯：秦の宰相。倉に住む鼠が米を食って安穩に暮らしているのを見て、人間も住むところにより禍福が変わる悟った。○徐福：仙薬を取りに行くと言って海外に去った。同じように悟りがなければ、海外に去ることもなかったであろう。○楚吟：屈原のように国を愁う詩を作ること。○野煙：野に立つ靄。○蹤跡：足跡、ゆくえ。○東周：洛陽に都を移した周。

【構成】

○尾聯において、別に新意を設けて、前六句を結んだもの。

結句

過九原飲馬泉

九原の飲馬泉を過ぐ

李益

綠楊著水草如煙

綠楊 水に著いて草煙の如し

舊是胡兒飲馬泉

旧是れ 胡兒の 飲馬泉

幾處吹笳明月夜

幾處か 笳を吹く 明月の夜

何人倚劍白雲天

何人か劍に倚る白雲の天

從來凍合關山路

從來 凍合す 関山の路

今日分流漢使前

今日 分流す 漢使の前

莫遣行人照容鬢

行人をして容鬢を照さしむること莫かれ

恐驚憔悴入新年

恐らくは驚かん 憔悴して新年に入るに

【語釈】

○九原：山西省忻県、諸説あり。○飲馬泉：不祥。○煙：霞。○笳：あし笛。○凍合：凍り付く。○關山：関所のある山。○漢使：作者らのこと。○行人：旅人。○容鬢：顔と鬢。○憔悴：やせ衰える。

欲到西陵寄王行周 西陵に到らんと欲して王行周に寄す 李紳

西陵沙岸回流急 西陵の沙岸 回流 急なり

船底黏沙去岸遙 船底 沙に黏して 岸を去ること 遙かなり

驛吏遞呼催下纜 驛吏 遞に呼びて 纜を下せと催し

棹郎閑立道齊橈 棹郎 閑に立ちて 橈を齊えよと道う

猶瞻伍相青山廟 猶お瞻る 伍相 青山の廟

未見雙童白鶴橋 未だ見ず 双童の白鶴橋

欲責舟人無次第 舟人の 次第無きを 責めんと欲すれば

自知貪酒過春潮 自ら知る 酒を貪りて 春潮を過ぎしことを

【語釈】

○西陵：浙江省蕭山市西興鎮。○王行周：不祥。○黏：粘り着く。○驛吏：宿場を管理する役人。○纜：ともづな。○棹郎：船頭。○伍相：伍子胥。浙江省杭州市の青山に廟がある。○雙童白鶴橋：浙江省杭州市にある橋。桓闐が二人の童子と共に、鶴に載って昇天したところ。○過春潮：春の潮が満潮になるのを見過ぎした。

洗竹

竹を洗ぐそそ

王貞白おうていはく

道院竹繁教畧洗

道院竹繁くして畧ほ洗すすがしむ

鳴琴酌酒看扶疎

琴を鳴らし酒を酌んで扶疎ふそを見る

不圖結實來雙鳳

図らず実を結んで双鳳そうほうを来すを

且要長竿釣巨魚

且かつ要す長竿ちょうかんの巨魚を釣るを

錦籜裁冠添散逸

錦籜きんたく冠かんを裁して散逸さんいつを添え

玉芽修饌稱清虛

玉芽ぎよくが饌せんを修め清虚せいきよに称かなう

有時記得三天事

時有りて記得きとくす三天の事

自向琅玕節下書

自みづから琅玕節下ろうかんせつかに向いて書おす

惜花

花を惜しむ

韓かん
偈あく

皴白離情高處切

すうはく りじょう
皴白の離情 高處に切に

膩紅愁態靜中深

ふこう しゅうたい
膩江の愁態 靜中に深し

眼隨片片沿流去

へんべん
眼は片々に隨いて 流れに沿いて去り

恨滿枝枝被雨淋

しし
恨は枝々に満ちて 雨に淋そそがる

總得苔遮猶慰意

総て苔の遮さざるを得ば 猶お意を慰さめ

若教泥汚更傷心

若し泥をして汚さしむれば 更に心を傷めん

臨階一盞悲春酒

階に臨んで一盞春酒を悲しむ

明日池塘是綠陰

明日池塘 是れ 綠陰

【語釈】

○皴白：しわの寄った白、凋みかけた花びら。○離情：離別の思い。

○高處：高い木の枝。○膩紅：艶やかな紅色（の花びら）。愁態：深

い愁い。○一盞：一杯。○春酒：冬に仕込んで春に仕上がる酒。○池

塘：池の堤。

詠物

崔少府池鷺

崔少府さいしょうふの池鷺ちろ

雍陶ようとう

雙鷺應憐水滿池

双鷺まさ応に憐むべし 水の池に満つるを

風飄不動頂絲垂

風ひるがえ飄れども動かず 頂糸垂るちようし

立當青草人先見

立ちて 青草に当れば 人先ず見み

行傍白蓮魚未知

行きて 白蓮に傍そえば 魚 未だ知らず

一足獨拳寒雨裏

一足 独り拳かがむ 寒雨の裏

數聲相叫早秋時

風声 相叫ぶ 早秋の時

林塘得爾須增價

林塘りんとう 爾を得て 須すべからく価を増すべし

況與詩家物色宜

況いわんや 詩家の 物色に宜しきをや

【語釈】

○崔少府…未詳。○雙鷺…一つがいの鷺。○頂絲…頭の頂の白い毛。
○一足…一本足で。○林塘…林の中の池の堤。○物色…風景。

鷓鴣

鷓鴣 しやこ

鄭谷 ていこく

暖戲煙蕪錦翼齊

暖く煙蕪に戯れて錦翼齊し えんぶ きんよくひと

品流應得近山雞

品流 応に得べし 山雞に近きを ひんりゅう さんけい

雨昏青草湖邊過

雨は昏く 青草湖邊を過ぎ くらは せいそうこへん

花落黃陵廟裏啼

花は落ち 黃陵廟裏に啼く こうりようびようり

遊子乍聞征袖溼

遊子 乍ち聞いて 征袖湿おい たちま せいしゆう

佳人纔唱翠眉低

佳人 纔かに唱いて 翠眉低る わずか うた すいびた

相呼相喚湘江曲

相い呼び 相い喚ぶ 湘江の曲 よ しょうこう くま

苦竹叢深春日西

苦竹の叢 深くして 春日西す くちく むら しゅんじつ

【語釈】

○煙蕪：煙霧の中の草叢。○錦翼：翼の美称。○品流：品がら、格付け。○山雞：キジ科の鳥。○青草湖：洞庭湖の南にある湖。○青草湖：洞庭湖の南にある湖。○黃陵廟：洞庭湖の口にあり、舜の二妃、娥香と女英を祀る廟。湘夫人祠ともいう。○遊子：旅人。○征袖：旅衣の袖。○佳人：美人。○翠眉：緑のまゆ。○湘江：湖南省最大の河川で、洞庭湖に注ぐ長江右岸の支流。○苦竹：ただけ。

緋桃

緋桃 ひとう

唐彦謙 とうげんけん

短牆荒圃四無鄰

たんしょう こうほ よも となり
短牆 荒圃 四に鄰無し

烈火緋桃照地春

ひとう
烈火の緋桃 地を照らす春

坐久好風休掩袂

たもと おおう やめ
坐すること久しくして好風に 袂を掩うを休よ

夜來微雨已霑巾

きん
夜來の微雨 已に巾を沾おす

敢同俗態期青眼

ぞくたい
敢えて 俗態と同じく 青眼を期せんや

似有微詞動絳脣

びし こうしん
微詞の 絳脣を動かす有るに 似たり

盡日更無鄉井念

じんじつ きょうせい
尽日 更に郷井の念無し

此時何必見秦人

しんひと
此の時 何ぞ必ずしも 秦人を見ん

【語釈】

○緋桃：ひもも。○短牆：短いかきね。○荒圃：荒れた畑。○巾：ハ
ンカチ。○俗態：いやしい態度。○期青眼：人に良く思われようとす
ること。晉の元籍の故事。○微詞：微妙な言葉。○絳脣：紅い脣。○
盡日：一日中。○郷井：ふるさと。○秦人：桃花源記の秦の人。俗世
間から離れた人。

牡丹

牡丹 ぼたん

羅 ら
鄴 ぎょう

落盡春紅始見花

しゅんこう 春紅 落ち尽くして 始めて花を見る

花時比屋事豪奢

かじ ひおく ぎょうしゃ 花時 比屋 豪奢を事とす

買栽池館恐無地

ちかん 買って 池館に栽え 地 無きを恐る

看到子孫能幾家

見て 子孫に到るは 能く幾家ぞ

門倚長衢攢繡輓

ちやうく よ 門は長衢に倚りて しゅうやく あつ 繡輓を攢め

幄籠輕日護香霞

とほり けいじつ こうか 幄は輕日を籠め 香霞を護る

歌鐘滿座爭歡賞

かしょう 歌鐘 満座 争って 歡賞す

肯信流年鬢有華

肯えて信ぜんや 流年 びん はな 鬢に華有るを

【語釈】

○春紅：様々な紅い春の花。○花：牡丹の花。○比屋：家々戸々。○豪奢：牡丹の豪華さ。○池館：池の畔の館。○長衢：大通り。○繡輓：美しく飾った車馬。○輕日：微弱な日光。○香霞：雲霞のような美しさ、花の美しさを言うのに用いる。○歌鐘：音楽。○鬢有華：鬢が白くなること。

牡丹

牡丹

羅ら
隱いん

似共東風別有因

東風と別に 因いん有るに似たり

絳羅高卷不勝春

絳羅こうら 高く巻いて春に勝えず

若教解語應傾國

若もし語を解せしむれば 応まさに 国を傾むくべく

任是无情也動人

任たといは無情なるも 也また 人を動かす

芍藥與君爲近侍

芍藥じやくやく 君が爲に 近侍きんじと為る

芙蓉何處避芳塵

芙蓉 何れの処か 芳塵ほうじんを避く

可憐韓令功成後

憐れむべし 韓令かんれい 功成りて後

辜負穠華過此身

穠華じようかに辜負こふして 此の身を過ごせしを

【語釈】

○東風：春風。○絳羅：紅いうすぎぬのカーテン。○任是：たとえ
であつても。○近侍：家来。○芳塵：かぐわしい塵。○韓令：韓弘。
戦功により中書令となつたが、庭の牡丹を見て婦女子のものとして
切り捨てさせた。○辜負：背く。○穠華：婦女子の青春の美貌。

梅花

梅花

羅隱

吳王醉處十餘里

吳王ごおう醉う処 十余里

照野拂衣今正繁

野を照らし 衣を払い 今まさ正に繁し

經雨不隨山鳥散

雨をふ経るも 山鳥に隨いて 散せず

倚風如共路人言

風によ倚りて 路人と共に言うが如し

愁憐粉艷飄歌席

愁あわれいて憐む 粉艷ふんえんの歌席に 飄ひるがええるを

靜愛寒香撲酒樽

静かに愛す 寒香かんこうの酒樽しゅそんを撲うつを

欲寄所思無好信

所思しよしに寄せんと欲すれども 好信こうしん無し

爲君惆悵又黃昏

君が為ちゆうちやうに 惆悵ちゆうちやうすれば 又 黃昏こうこん

【語釈】

○粉艷：妖艷な顔色。梅の花びらの形容。○寒香：ひややかな香。梅の香りの形容。○所思：想う人。○好信：都合の良い便。○惆悵：嘆き悲しむ。○黃昏：たそがれ。